

第 17 回大阪大学専門日本語教育研究協議会

大学の研究室コミュニティで見られるコミュニケーションの諸相
ー理工系研究室の留学生の事例分析から専門日本語教育・学習支援を再考するー

報告書

大阪大学 国際教育交流センター

2025 年（令和 7 年）2 月 18 日

第17回大阪大学専門日本語教育研究協議会

目次

プログラム	1
背景および趣旨	2
趣旨説明	国際教育交流センター 教授 村岡 貴子 3
講演：理工系研究室における人間関係・コミュニケーション機会・スピーチスタイル	16
東京海洋大学 学術研究院教授 生天目 知美	
発表1：理工系研究室における研究指導・学習支援の実態 ー指導教員へのインタビュー調査からー	52
国際教育交流センター 講師 福良 直子	
発表2：学際融合クラス「上級専門日本語アカデミック・コミュニケーション」の教育実践	71
国際教育交流センター 特任助教 瀬井 陽子	
全体討論	89
写真：協議会の様子	92
付録：過去の大阪大学専門日本語教育研究協議会の開催状況	93

第 17 回大阪大学専門日本語教育研究協議会

大学の研究室コミュニティで見られるコミュニケーションの諸相

—理工系研究室の留学生の事例分析から専門日本語教育・学習支援を再考する—

日時：2025年2月18日（火）13：15～16：50（受付12：50）

場所：大阪大学吹田キャンパス コンベンションセンター会議室3

主催：大阪大学国際教育交流センター

----- プログラム -----

総合司会 国際教育交流センター 准教授 中俣 尚己

- | | | | |
|-------------|---|------------------|--|
| 13：15～13：20 | 開会の挨拶 | 国際教育交流センター センター長 | 有川 友子 |
| 13：20～13：30 | 趣旨説明 | 国際教育交流センター 教授 | 村岡 貴子 |
| 13：30～14：30 | 講演：理工系研究室における人間関係・コミュニケーション機会・
スピーチスタイル | 東京海洋大学 学術研究院教授 | 生天目 知美 |
| 14：30～14：45 | 休憩 | | |
| 14：45～15：15 | 発表：理工系研究室における研究指導・学習支援の実態
—指導教員へのインタビュー調査から— | 国際教育交流センター 講師 | 福良 直子 |
| 15：15～15：45 | 発表：学際融合クラス「上級専門日本語アカデミック・コミュニケーション」の
教育実践 | 国際教育交流センター 特任助教 | 瀬井 陽子 |
| 15：45～15：55 | 休憩 | | |
| 15：55～16：45 | 全体討論 | 司会 国際教育交流センター 教授 | 村岡 貴子
東京海洋大学 学術研究院教授 生天目 知美
国際教育交流センター 講師 福良 直子
国際教育交流センター 特任助教 瀬井 陽子 |
| 16：45～16：50 | 閉会の挨拶 | 国際教育交流センター 教授 | 義永 美央子 |

第 17 回大阪大学専門日本語教育研究協議会

大学の研究室コミュニティで見られるコミュニケーションの諸相

ー理工系研究室の留学生の事例分析から専門日本語教育・学習支援を再考するー

主催 大阪大学国際教育交流センター

背景および趣旨

大阪大学専門日本語教育研究協議会は、2024 年度で 17 回を迎えます。本協議会が発足した背景には、留学生 30 万人計画をはじめとする国の政策により、多様な国・地域から多様な分野の留学生を受け入れ、当該留学生の日本語能力に応じて大学生活に必要な日本語教育が活発に行われてきたという大きな流れがあります。大阪大学においても、日本語学習経験がほとんど無いか少なくとも、来日後に日本語教育を受け、同時に研究活動に取り組み学位取得を目指すという大学院生・研究生が、英語プログラムの場合も含め、特に理系分野に多数在籍しています。本協議会では、特に理工系分野の研究室に所属し人間関係を構築しつつ所期の目的を達成しようとする留学生のコミュニケーションにフォーカスします。

上記のような留学生が所属する研究室では、構成員の母語や日本語・英語運用能力により、また、研究室文化により受け継がれてきた伝統的な方針により、実際に多様な背景の構成員同士で多様なコミュニケーションが行われていると観察されます。日常的に共同研究体制が敷かれていることの多い理工系では、共同研究に必要な厳密な言語コミュニケーションが行われる必要があり、そのことが研究の成否に繋がるものと考えられます。そのような研究室の状況は、入学前から高度な日本語能力を有する文系大学院留学生の状況とはかなり異なる面があります。また、文系出身者で日本語教育を担当する教員も、理工系研究室のコミュニケーションについて未知のことが多々あるものと推測されます。

以上のような背景と前提をもとに、本協議会では、異文化の中で学位取得を目指す留学生が、一研究者としてリスペクトされつつ、異なる背景の他者と日々協働作業を進めるプロセスで、どのような問題・課題を抱え、どのようにそれを克服しようとするのか、具体的なコミュニケーションに関する事例分析をもとに、協議を展開したいと考えます。

講演者として、専門日本語教育研究等の分野でご活躍になっている専門家の東京海洋大学の生天目知美先生にお話しいただき、CIEE からも関連の発表・実践報告を行います。その上で、全体討論において今後必要な専門日本語教育・学習支援を展望し、さらに、留学生・研究室構成員、教職員がよりよく連携できる可能性を探りたいと思います。

趣旨説明

村岡 貴子

国際教育交流センター 教授



2025.2.18 第17回大阪大学専門日本語教育研究協議会
於：コンベンションセンター会議室2

「大学の研究室コミュニティで見られるコミュニケーションの諸相
－理工系研究室の留学生の事例分析から専門日本語教育・学習支援を再考する」

趣旨説明

－留学生の研究コミュニティに着目する意義を共有する－

村岡 貴子

MURAOKA Takako

大阪大学 国際教育交流センター

日本語教育研究チーム

muraoka.takako.ciee@osaka-u.ac.jp

1

内容

1. 本協議会の背景と趣旨
2. 大阪大学の留学生の現況および
国際教育交流センター（CIEE）による
全学留学生向け日本語プログラム
3. 専門日本語と専門日本語教育
＋参考：理工系大学教員へのインタビューから
4. 講演・発表と全体討論に向けて

参考文献

2

1. 本協議会の背景と趣旨

3

1. 本協議会の背景と趣旨 －前提として－

大学での日本語教育に関する現状認識：

- (1) 多様な背景・専門分野の留学生
- (2) 多様な留学目的と留学プログラム
- (3) 多様な研究コミュニティや研究室文化・使用言語
- (4) 多様な日本語教育のデザインと学習支援

4

1. 本協議会の背景と趣旨 －対象・研究課題・方法－

- ◆ 異文化の中で学位取得を目指す理系留学生に着目する。
- ◆ 理系留学生は、異なる背景の他者との協働作業を進めるプロセスでどのような問題・課題を抱えているのか。
- ◆ どのようにそれらを克服しようとするのか。
- ◆ 関連のコミュニケーションについての研究成果や事例に基づいて協議を展開し、関連の教育実践についても意見交換を行う。

5

1. 本協議会の背景と趣旨（再掲） －前提として－

大学での日本語教育をめぐる現状認識：

- (1) 多様な背景・専門分野の留学生
- (2) 多様な留学目的と留学プログラム
- (3) 多様な研究コミュニティや研究室文化・使用言語
- (4) 求められる多様な日本語教育のデザインと学習支援

次に、(1)と(4)について大阪大学の例を示す ⇒

6

理系の大学院留学生の人数と所属先

✓ 在学段階：

大学院生（M, D）：1,082人（全大学院留学生の63%）

✓ 所属先：

理学研究科、医学系研究科、歯学研究科、薬学研究科、工学研究科、
基礎工学研究科、情報科学研究科、生命機能研究科、
連合小児発達学研究科、微生物病研究所、産業科学研究所、蛋白質研究所
接合科学研究所、レーザー科学研究所、核物理研究センター

（以上、大阪大学公式ホームページ「外国人留学生数」2024より

<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/about/data/international.html> 2025.1.30アクセス）



9

2. 大阪大学国際教育交流センターによる 日本語教育・日本語学習支援

参考：

◇ 留学生日本語プログラム

https://ciee.osaka-u.ac.jp/education/Japanese_program/

◇ OUマルチリンガルプラザ

<https://www.lang.osaka-u.ac.jp/cme/plaza/>

◇ OUマルチリンガルプラザ日本語学習者向け情報

[日本語学習者向け情報2024秋冬 | OUマルチリンガルプラザ](#)

10

3. 専門日本語と専門日本語教育

+参考：理工系大学教員へのインタビューから

11

3. 専門日本語と専門日本語教育

「専門日本語」

- 大阪大学における理工系留学生対象の日本語教育に関する研究協議会において使用されてきたものである。
(深尾1999)

→ 当時は新しい用語で厳密な定義が定まっていなかった。

12

3. 専門日本語と専門日本語教育

「専門日本語」

- 大学における研究活動で用いられる、**専門用語**も含めた**日本語表現を示す解釈**が存在：

学会誌『専門日本語教育研究』や『日本語教育』に分野別の語彙（ごい）・表現の研究結果が多数あり。

- Japanese for General Purposesとしての従来の日本語教育では扱われてこなかった日本語表現の使用傾向が分野ごとに明らかにされてきた。（村岡2014）

13

3. 専門日本語と専門日本語教育

「専門日本語」の範囲拡大

- 2000年代以降：
ビジネスや技術研修、医療、観光等、特定の職業場面で用いられるという、より広義の解釈がなされるようになった。

- Japanese for **Specific Purposes**へ

（村岡2014）

14

3. 専門日本語と専門日本語教育

「専門日本語」の範囲と方法論への示唆

(日本語学の知見から)

- 「専門言語」の2側面：
 - ① 専門分野に特有な単語
 - ② 専門分野における文法的な特徴や位相・文体的特徴
- 「言語生活」を調べる有用性

(国立国語研究所1981)

15

「専門日本語教育」とは

- ◆ 時間に制限のある留学生が研究活動を円滑に遂行するためという日本語学習の目的を自覚していることを前提とし、その目的達成のために行われる日本語教育

(村岡 2023)

- ◆ 学習者が同じ目的や志を有するコミュニティ、例えば研究室や学会活動への参画の際に必要なであり、さらに将来の職場へのスムーズな参加や適応を支え、学習者のQOLに直結するもの

(村岡2017)₆

参考1：日本の理工系大学教員へのインタビューから

◎協力者a（工学系）の事例：

「**実験レポート**」学部1年次から実験系授業で課される。

例：

用紙サイズ・横書き、表紙と綴じ方、内容の構成（1. 目的、2. 実験装置ならびに方法、3. 実験結果、4. 考察、5. 結論）、
図表の書き方、出典明記といった作成要領が決められており、
毎回20ページ以上のレポート作成が課される。

（村岡（2023） p.182）¹⁷

参考2：日本の理工系大学教員へのインタビューから

◎協力者b（理学系）の事例：

「**実験ノート**」

「日付、タイトル、実験方法（プロトコル）、
実験結果（文章で書く。データはノートに貼付）、
考察」といった流れで作成され、基本的に、**研究室からの持ち出しは禁止**されている。

（村岡（2023） p.182）

18

参考3：日本の理工系大学教員へのインタビューから

◎ 協力者c（工学系）の事例：

「実験ノート」

「普段は人に見せるものではない」ものの、資料や装置、測定のための条件などを明確に書き、「特許やねつ造に関する裁判の証拠にもなる」ため、筆記具は消せないものを用いる必要がある。

（村岡（2023） p.194）

19

4. 講演・発表と全体討論に向けて

20

4. 講演・発表と全体討論に向けて

理系留学生の研究コミュニティに関わる要素：

- 多様な分野と研究室文化
- 各構成員の日本語・英語等の言語運用能力
- 共同研究体制
 - ⇒ 厳密なコミュニケーション（研究の成否に直結）が必要、人間関係構築が重要



21

4. 講演・発表と全体討論に向けて

1. 理系の研究コミュニティメンバーの留学生によるコミュニケーションの方法や経験を知る。
2. 日本語教育学とは異なる分野の事情を学び、今後の研究と教育実践に役立てる。
3. 上記1と2の知見の、日本語教育学への貢献と意義を検討し、共有する。



22

引用文献

- 大阪大学公式ホームページ「外国人留学生数 2024」
<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/about/data/international.html>
- 大阪大学国際教育交流センター公式ホームページ「教育・学習支援」
https://ciee.osaka-u.ac.jp/education/Japanese_program/
- 国立国語研究所（1981）『国立国語研究所報告68 専門語の諸問題』
秀英出版。
- 深尾百合子（1999）「専門日本語教育に期待するもの」『専門日本語
教育研究』専門日本語教育学, 創刊号, pp.6-9.
- 村岡貴子（2014）『専門日本語ライティング教育－論文スキーマ形成
に着目して－』大阪大学出版会。

23

引用文献

- 村岡貴子（2017）「東アジアを中心とした専門日本語教育の実践拡大と
研究開発の可能性－研究者間の連携・協働の強化を目指して－」
（パネルディスカッション『日本語教育を核とする異文化相互理解教育・
国際連携教育の開発に向けて』）『第18回東アジア国際日本語・日本文化
フォーラム予稿集』pp.13-14, 九州大学, 2017.2.4.
- 村岡貴子（2023a）「留学生の研究生生活を支える専門日本語教育」
（第1章）村岡貴子編著『大学院留学生への研究支援と日本語教育
－専門分野の違いを超えて－』pp.3-18, ココ出版。
- 村岡貴子（2023b）「理工系留学生に必要な日本語ライティング力」
（第10章）太田亨・安龍洙・村岡貴子・門倉正美編著『日本で学ぶ理工系
留学生－教育・研究・留学生活－』ココ出版。

24

講演 1

理工系研究室における人間関係・
コミュニケーション機会・
スピーチスタイル

生天目 知美

東京海洋大学 学術研究院教授

第17回大阪大学専門日本語教育研究協議会
2025.2.18@大阪大学吹田キャンパス

理工系研究室における人間関係・ コミュニケーション機会・スピーチスタイル

東京海洋大学 生天目知美

本日の講演内容

1. 研究の背景
2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係
3. コミュニケーション機会の特徴
4. 研究室で選択されるスピーチスタイル
5. 専門日本語教育への示唆

1. 研究の背景__研究の経緯

・本務校の環境…小規模、学生や専門教員との距離が近い

・教育経験 …留学生の研究室でのコミュニケーションが不明

①「研究室でなかなかいい関係が作れません」→大学院留学生の実態を把握できているか？

・研究室の中でどのようなコミュニケーション？

・どのように人間関係を構築？

②「普通体はあまり使いません」→関係作りの会話はカジュアル？

・大学院留学生は会話の教科書にあるような普通体の雑談をしていない？

・学部生→大学院生→社会人

「大学院生」を「学部生」とは区別し、

「社会人」へ続く橋渡しの段階であることを意識する必要があるのでは

3

3

1. 研究の背景__目的

理工系大学院生に対する専門日本語の教育のうち、

人間関係構築のために重要な役割を果たす

雑談を中心としたコミュニケーション機会について

・研究室において志向される人間関係

・コミュニケーション機会（特徴と創出）

・スピーチスタイルの選択

研究室の撮影データと日本人学生・留学生へのインタビューで明らかになったことを報告

4

生天目知美(代表)・大島弥生・居關友里子(19K00733)
「大学コミュニティにおける留学生と日本人学生の待遇コミュニケーション」

調査① 研究室でのインフォーマルな会話はどのように行われるか (撮影データ)

居關友里子・生天目知美(2023)

「理工系研究室におけるコミュニケーションの実態—交感的コミュニケーションに注目して—」
『専門日本語教育研究』第25号, pp.27-34.

調査② 留学生は研究室でどのように人間関係を構築し、スピーチスタイルを選択するか (インタビューデータ)

生天目知美・大島弥生・居關友里子(2024)

「理系研究室における留学生の人間関係構築とスピーチスタイル選択」
『社会言語科学』第26巻第2号, pp.19-34.

調査③ 日本人学生は研究室でどのようにスピーチスタイルを選択するか (インタビューデータ)

生天目知美・居關友里子(2025)

「理系大学院研究室における日本人学生のスタイル選択意識」第26回JLEM発表予定

5

1. 研究の背景_「専門日本語教育」における位置付け

「専門日本語」(村岡2003)

「特定の分野での学習・研究活動において、その目的や場面、状況、対人関係および、話し言葉か書き言葉かにより、各々に適した様式で用いられる、単語、文型、談話・文章を広く含むもの」

「専門日本語教育」(村岡2017)

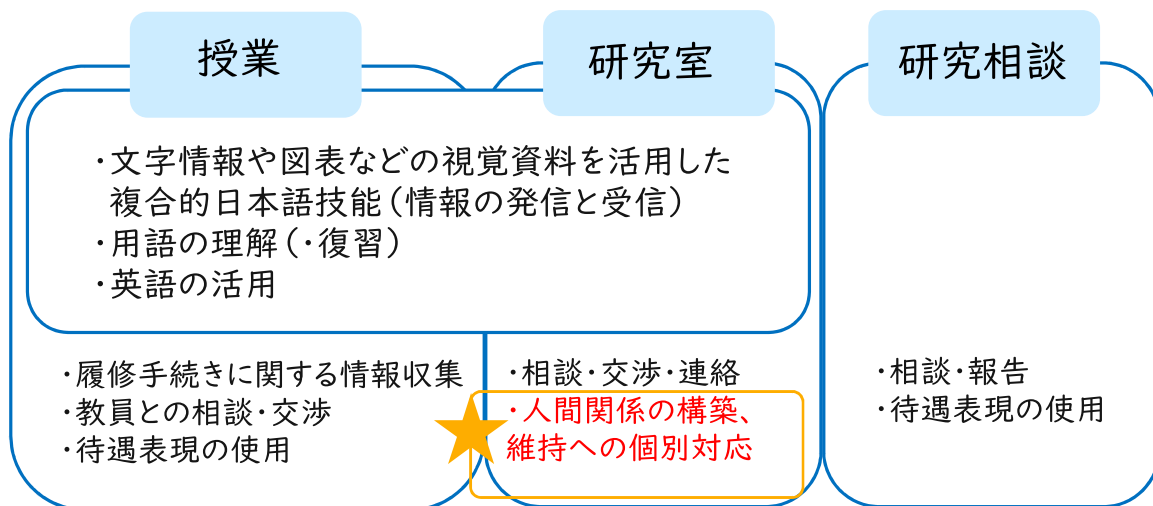
「学習者が同じ目的や志を有するコミュニティ、例えば研究室や学会活動への参画の際に必要であり、さらには**将来の職場へのスムーズな参加や適応を支え学習者のQOLに直結するもの**」

「専門日本語コミュニケーション」(村岡2003)

「専門日本語が実際に用いられる場面でのコミュニケーション活動の様態を示すもの」

6

専門日本語コミュニケーションの種々の場面で
求められる具体的対応（村岡2003,表6より）



それぞれの専門日本語コミュニケーションを支える部分

研究室における「雑談」を通じた人間関係構築の重要性

雑談やインフォーマルな活動参加を通して醸成される「信頼・信用」

（ソーヤー2006）

- 実験かつグループ研究が多い研究室で重要な実験装置へのアクセスの成否を決めた
- 実験などのフォーマルな活動だけではなく、雑談や食事などを通じたインフォーマルな活動参加の重要性が指摘された

研究室で他のメンバーとうまくやっていくために必要なこと

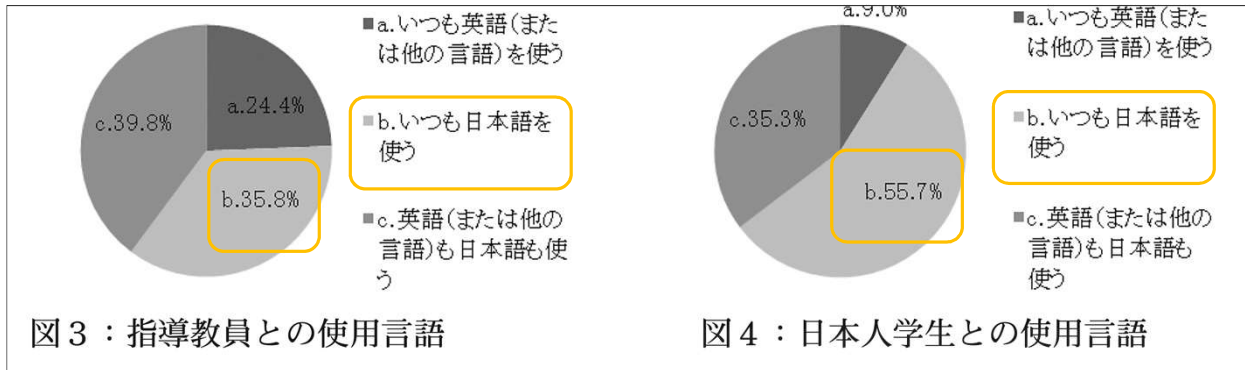
（重田2008）

- グループ研究/個人研究によらず、日本人学生も留学生も「話す」ことの重要性を指摘
- 内容は「研究」だけではなく「雑談」も重要
- 留学生は「日本語で」話すことの重要性も指摘
- 「充実した研究生活に必要なこと」でも研究室における人間関係の重要性が指摘された

8

理工系大学院生の日本語使用環境 (羽吹・篠原2014)

約20の大学へのwebアンケート(2013年) 留学生回答201件



日本人学生とは日本語を使用する機会が多い

9

理工系大学院生の日本語使用環境 (羽吹・篠原2014)

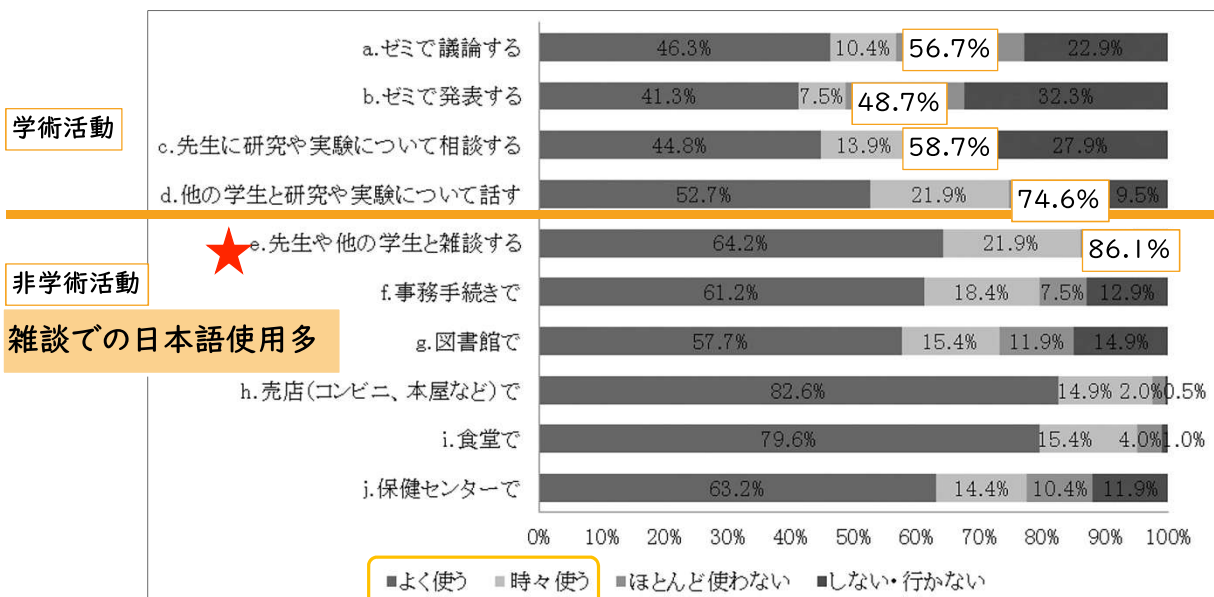


図5：研究活動・大学生活における日本語使用場面 (留学生回答)

10

研究室における留学生による丁寧さの選択

・村岡(2003):理工系研究室

_コミュニケーション上の**困難点**は多様な場面での**待遇表現の使い分け**

_相手によって**適切な待遇表現**を選択したり、

話題を見つけて会話を維持したりすることに**困難**

・三牧(2002):工学系研究室

_丁寧体・普通体の**使い分け**がされていた

_日本語能力不足から**安全策**として**間違いのない丁寧体**を選択

11

本日の講演内容

1. 研究の背景

2. **コミュニティのメンバーが志向する人間関係**

3. コミュニケーション機会の**特徴**

4. 研究室で**選択されるスピーチスタイル**

5. 専門日本語教育への**示唆**

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【調査方法(調査①、調査③)】

遠隔での半構造化インタビュー(一人1時間半~2時間)

留学生 : 2021年8月~12月

日本人学生: 2021年9月~2023年3月

<質問項目>

- ・研究室での過ごし方(研究室へ行く頻度、メンバーと話す頻度)
- ・メンバーとのコミュニケーション(雑談の有無、親密さ、理想の人間関係)
- ・日本語のスピーチスタイルの選択

→留学生データ: M-GTAで人間関係構築とスピーチスタイル選択のプロセスを分析
※本発表における日本人学生データは留学生データの分析に追加して示す

13

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【留学生の研究協力者】

- ・非実験系・個人研究が中心の理系研究室(①、②、③)に所属する大学院留学生4名
- ・学術活動では英語も使用するが、研究室内の会話はすべて日本語を使用
- ・それぞれ修了直前の時期にインタビューを行った。

表1 研究協力者

	所属 研究室	母語	性別	学年	所属 年数
A	①	中国語	女性	D3	4年
B	②	中国語	女性	M2	2年
C	②	中国語	男性	M2	2年
D	③	中国語	女性	M2	2年

14

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【日本人学生の研究協力者】

- ・非実験系・個人研究が中心の理系研究室(①、②)に所属する大学院生5名
- ・それぞれの研究室には複数の留学生が所属していた。
- ・それぞれ修了直前、終了後にインタビューを行った。

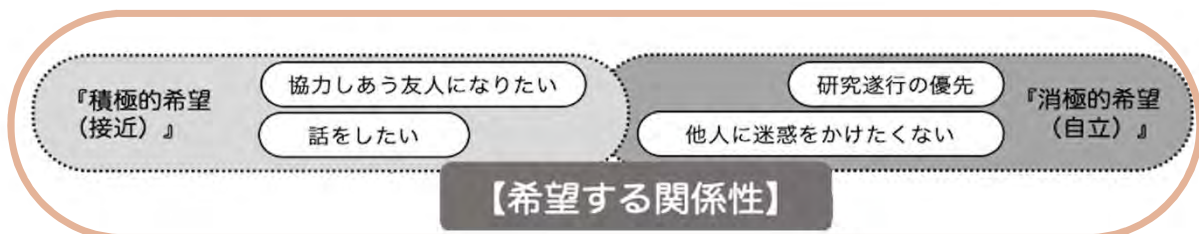
表2 研究協力者(日本人学生)

協力者	研究室	性別	協力者	研究室	性別
A	①	男性	D	②	男性
B	①	男性	E	②	女性
C	①	男性			

15

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【留学生の研究協力者】

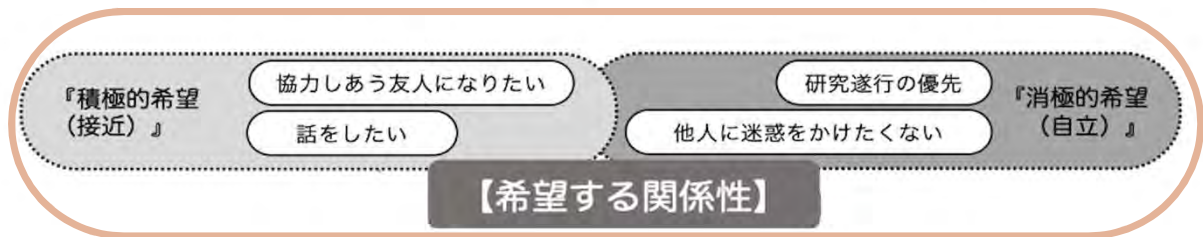


本研究の協力者(留学生)はバランスは異なるものの、
両方の希望を持っていた

16

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【留学生の研究協力者】



「先輩、後輩問わず、誰でも仲良しになりたい」

「まず研究関係が一番重要だと思います。個人関係は普通そんな重要ではありません」

「日本人の友達がいたらもっと嬉しい」

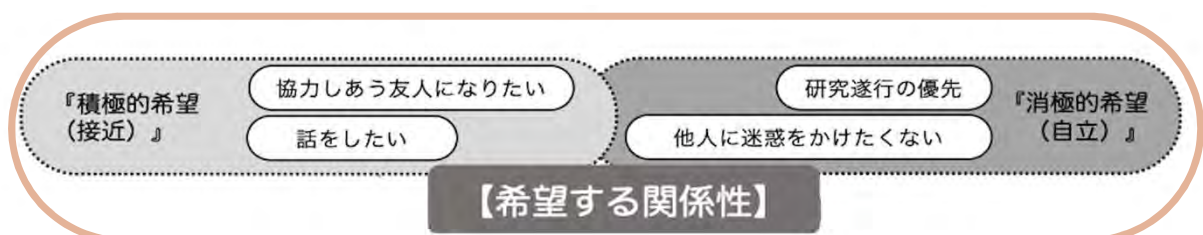
「他の人に迷惑をかけたくない方です。だからあんまり助けて欲しいところもないです。自分で解決できるので。」

「なるべく周囲の日本人学生と話したい」

17

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【留学生の研究協力者】



(消極的希望(自立)が強い留学生に対して)

私からヘルプサインは出していないから、立ち入らないで、というのは、やっぱり感じたところがあります。すごく迷っていらっしゃる際も、僕が助けに行くと、問題は解決するけど、それ以上は話さない。

→本当に困っているときは、たぶん声をあげるから、そのときに行こう、というふうになりました。

→お別れ際(修了時)に、下手に干渉してくるんじゃなくて、自由にやらせてくれたおかげで、気兼ねなく、ストレスフリーでできたというふうに言ってもらったという。

18

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【日本人学生の研究協力者(一般)】

<消極的希望(付かず離れずの距離感)>

雑談するレベルでいい。休日に遊びに行くまでは行かなくていい。
実験器具もあるので分からないことがあったら聞きやすい雰囲気が大事。

分からないことがあればお互いに聞き合える、雑談ができる、
付かず離れずの距離感が理想。先輩だったら可愛がってもらえたり
頼れたりするので仲良くなりたいが、同級生や後輩なら共通の趣味で
よほど話が合ったりしない限り仲良くなりたいとは思わない。
研究室はプライベートではない。

19

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【日本人学生の研究協力者(一般)】

<積極的希望>

同じ研究室のメンバーとして仲良くなりたい気持ちは常にある。
研究室外の友人の方が仲が良いが、逆に言えば深い話をしないので相手と
の相性は抜きで軽い感じで話せるところもある。

研究室以外の友達が少なかったので、研究室のメンバーが一番気軽に話しや
すい関係だった。趣味の話をする事が多く、メンバー間で旅行が趣味の人が
多くて仲良くなれた。

20

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【日本人学生の研究協力者(対 留学生)】

<消極的希望(異文化や共通点がないことへの不安)>

外国の方に慣れていなくて日本人と比べて話しかけにくい。

うまく説明はできないが、抵抗感がある。

(日本語能力の問題は全くない)

語学の面では自分は英語も話せるので心配していないが、アニメやアイドルなど共通の話題で盛り上がりにくい。

21

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【日本人学生の研究協力者(対 留学生)】

<積極的希望(異文化への興味関心)>

(中国に留学した経験もあり)海外自体好きなので、留学生と交流できるのがいいと思って、(留学生が多い)この研究室に入った。理想としては話しかけて出身国のことを聞いたりして、相手をどんどん知っていったらと思う。

自分自身が英語が得意ではなかったのに、英語で話して少しでもお互いに練習できればいいと考え、親しくしたいという気持ちがあった。

22

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【日本人学生の研究協力者(対 留学生)】

<積極的希望(自身の留学時のお返しとして留学生を助きたい)>

(中国に留学した経験) 言語がわからない時期がかなり長かった。そのときに、やっぱり
ぜんぜん下手くそでもいいから英語とかわかる言語で話してくれたりとか。何も気にせず
会話をしてくれようという姿勢が、かなりうれしいと思っていた。(その経験から) 留学生
がわからないときがあれば、何かしら使って会話をしてみたりというのは、意識していた。

(オーストラリアに留学した経験) 海外にいたときに、けっこう現地の方が手を引っ張って
くれたりとか、話しかけてくれたということもあったので、やっぱりせっかく日本に来てくれ
たなら、もうちょっと過ごしやすいようにしてもらえればいいかなという思いがあったので。
なるべくこっちから積極的に。Aさん、研究どうですか、みたいな感じで、話しかけたり。

23

2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係

【まとめ】

積極的希望

分からないことを
聞き合える

雑談ができる

消極的希望

【(プライベートな)友人関係を求めるか】

【「異」への興味】

【ゲストとホスト(助ける・助けられるの関係)】

24

本日の講演内容

1. 研究の背景
2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係
3. コミュニケーション機会の特徴
4. 研究室で選択されるスピーチスタイル
5. 専門日本語教育への示唆

3. コミュニケーション機会の特徴

- 3.1. 研究室の環境
- 3.2. コミュニケーション機会の創出
- 3.3. 話題

3.1. 研究室の環境

【調査の概要（調査②）】

- ・理工系研究室（グループ研究・個人研究混在）
（博士課程4名、修士課程6名 うち4名（博士2名、修士2名）が留学生）
- ・研究室には固定の作業机（資料棚あり，向かい合わせ）
- ・全員の同意を得た上で小型ビデオカメラ2台を設置
（2019年7月収録，月～金の5日間，9h/d）

27

3.1. 研究室の環境

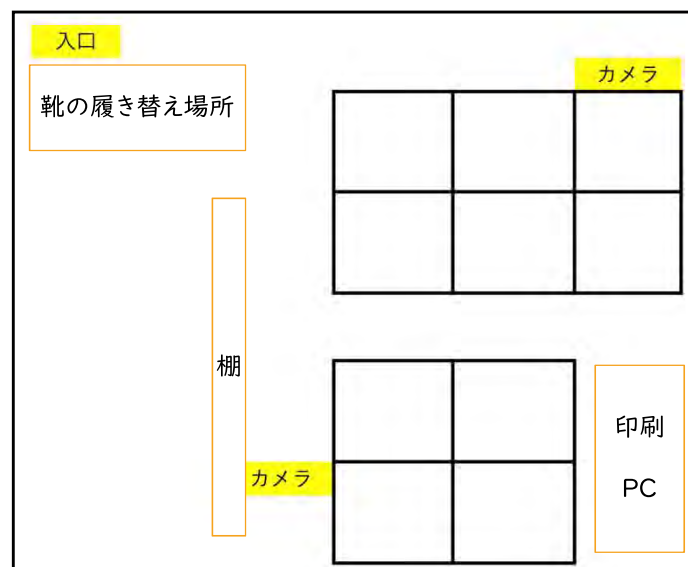


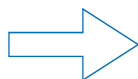
図1 研究室の配置図

28

3.1. 研究室の環境

【調査結果】

- ・研究室を利用した学生:7名 / 10名(うち3名が留学生)
- ・利用頻度や滞在時間は様々
短い:資料を取りに来るだけ
長い:8~9時間滞在する学生も
- ・利用頻度や滞在時間によらず、メンバー間のやりとりは限定的
短い:数秒
長い:一日30分程度



無言の時間が圧倒的に長い

29

3.1. 研究室の環境

【調査結果】

無言の時間が圧倒的に多い

研究の作業をするための滞在



資料棚で
視覚的に仕切られた空間

コミュニケーション機会は多くない

- ・コミュニケーション機会があるのは…
左右の席のメンバー
自席に立ち寄るメンバー

視覚的・聴覚的に注意→機会の調整

- ・研究活動に没頭している→回避
- ・研究室への出入室 → 可能な機会
- ・研究室内の移動

30

3.1. 研究室の環境

やり取りの種類

(1) 挨拶

(2) 生活や研究活動に必要となる情報の共有（機材や指導教員の連絡など）

(3) 学生生活や研究活動に関わる相談（履修、奨学金手続き、資料など）

(4) 世間話・軽い雑談（気候、簡単な研究の進捗報告など）

→「**交感的コミュニケーション**」(phatic communion) Malinowski (1923)

情報交換というよりは言葉を交わすこと自体を目的としたやり取り
やり取りする人同士の良好な関係の構築や維持が目的

31

3.1. 研究室の環境

研究室における交感的コミュニケーション

- ・「挨拶」が重視されている
- ・ 研究の場である研究室
→関係を深めるための雑談というよりは、
相手に対する関心と配慮を示すための短い「世間話」

例) 挨拶 → 世間話（気候 / 学内イベント など）
2～3往復

32

3. コミュニケーション機会の特徴

3.1. 研究室の環境

3.2. コミュニケーション機会の創出

(撮影データとインタビューデータから)

3.3. 話題

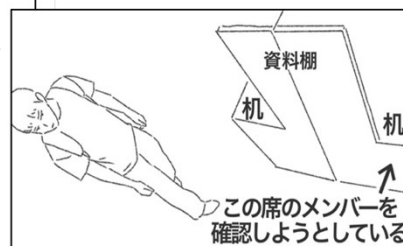
3.2. コミュニケーション機会の創出

① (研究の邪魔にならない) やり取りが可能な際に行う

【事例1】やり取りが可能な状態であることを確認してから世間話

【事例1】N(日本人学生,後輩)、E(留学生,先輩)^{注2}

1. ((ドア開閉音, N 入室))
2. e イヤホンを耳から外し、机から顔を乗り出す
3. n E の机に歩み寄りながら笑顔
4. N: hh お疲[れ]さまです
5. E: [お疲]れさまです
6. N: .hh もう皆さんお帰りになりましたか?
7. n 机の横で立ち止まり、E に身体を向ける
8. E: ¥そうです¥
9. N: え::A さんも?hh
10. E: ¥そうです¥



3.2. コミュニケーション機会の創出

① (研究の邪魔にならない) やり取りが可能な際に行う

【その他(インタビューより)】

LINEなどで相手の状況を確認 / 研究の話のついでに

「だいたい雰囲気とかでわかるのと、それか、一度LINEを送って、メッセージが返ってきてから話すというのはありました。

今、質問していいですか、みたいな。先輩とかだったら。安心だし、お互いの邪魔にならないかなと思って。」

「研究の話をしたあとに、ちょっときっかけとして最近はどう? とか、そういう簡単な雑談を入れていったほうがいいのかな」

35

3.2. コミュニケーション機会の創出

① (研究の邪魔にならない) やり取りが可能な際に行う

【事例2】 出入室の際に、ごく短いやり取りを行う

【事例2】 T(日本人学生, 後輩)、N(日本人学生, 先輩)

1. t 奥の席のメンバーに挨拶しドアに向かって移動
2. T: お疲れさまです((歩きながら一瞥、軽く会釈))
3. N: あお疲れ:い.
4. n ドア前(=T が靴を履き替えている)を見る
5. (3.0)
6. N: ロシア寒かった?
7. T: いや(.)若干涼しいぐらい(.)ですね.
8. N: あそんなもんなんだ.お疲れっ.
9. ((ドア開閉音))

36

3.2. コミュニケーション機会の創出

① (研究の邪魔にならない) やり取りが可能な際に行う

【事例3】隣合った席で、緩やかに会話の離脱と復帰を繰り返す

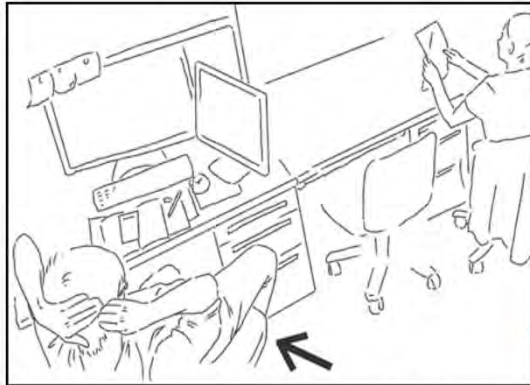


図3 上半身を大きく引く

「一度始まった会話がいつでも再開可能な状態の継続している状況」
(continuing states of incipient talk)
Schegloff, & Sacks (1973)

会話参加が可能な状態であることを示す

37

3.2. コミュニケーション機会の創出

② 共食に伴う機会

お菓子やお土産を渡す

コミュニケーション機会を創出しやすい

「隣は日本人の学生でして、一緒に食べ物を分けて食べますかというふうにまず声をかけて、この食べ物は中国でもありますよ。そういうことからどんどん交流が増えました」

「(親密な関係になりたい時は) ちょっとしたお菓子を渡しに行って、その流れでって感じて(話す)」

38

3.2. コミュニケーション機会の創出

研究室外

食事(ランチ)

② 共食に伴う機会

実現には一定の条件(習慣、普段の親密な関係)が必要?

「毎日行きます。毎日研究室にいるから私たち仲良くなりました」

「そこまで関係が近くないのでほとんど行かないです」

「研究室と一緒にいて、学食と一緒に食べに行ったりとか。基本的にAさんが昼にいるときは、ほぼ学食に行っているっていうのは知っていたので、行く? っていう感じで、お互いですね。」

「(親密になるには)一緒にやっぱり食事に行くというのが、話しやすいかなと思っていて。」

39

3.2. コミュニケーション機会の創出

研究室外

飲み会

② 共食に伴う機会

教員が設定する「飲み会」は普段話せない人と話せる貴重な機会であり、普段の壁が消失する機会。

「この人達は私たちと同じ普通だな。中国人、日本人というわけではなく、ただの学生さん。同じ学生さん。」

「正直そのときの雰囲気は研究室と全然違います。みんなが後輩、先輩関わらず、みんなが仲良くなります。友達同士のように話します。」

やっぱり飲み会のおかげで仲よくなれた人とか、もちろん日本人学生、留学生かかわらず(仲良く)なれた人とかもいるので、かなりそれはいい機会ではあったのかなって思います。

普段は研究室にいない学生とかもちろほらいるので、その人たちと会うきっかけにもなりますし、やっぱり研究室では話せないこととかも話せたりするので、かなり。

40

3.2. コミュニケーション機会の創出

研究室外

② 共食に伴う機会

飲み会 ※しかし、「飲み会」の時に感じた壁の消失は一時的な場合も…

「普段は話さない人がお酒を飲んだらいっぱい話していて、裏の様子が見られる感じで、翌日を見たらちょっと気まずいなということよくあります。」

「飲み会だけでテンションが上がって、たぶん雰囲気の関係で皆が仲良くて、でも翌日普通の生活に戻って。」

「翌日はあまり知らない人に戻った感じ。3回観察して同じ。普通の人になりました。冷たいというか、私に関係ない感じでとても残念でした。」

41

3.2. コミュニケーション機会の創出

研究室内外

③ 実験に伴う機会

個人実験の補助では、「頼みやすさ」が機会を創出

「彼がすごく仲よくしてくれていたの、あとは研究室に常にいたというのもあります。彼が、すごい頼みやすくして頼っていましたね。

彼が卒業してからは、本当に誰とか決めているわけではなく、研究室にいて、手が空いていそうな人に声をかけたりって感じでした。」

グループ実験では、「連携の必要性」「同じ苦労」が機会を創出

「やっぱり一緒に実験をしたりするのは、すごくそのあとの関係性にはいい影響があるというのは間違いだと思いますね。(略)しゃべりやすくなりますね。」

「連携しなきゃいけないというところで、強制的にコミュニケーションを取らないといけないというところもありますし、やっぱり同じ苦労をするというのが、そのあとのコミュニケーションにつながるのかなと思います。」

42

3.2. コミュニケーション機会の創出

④ 「研究室にいる」こと

「研究室にいる」→「話す頻度が増える」→「話しやすくなる」→他の機会へ波及

「研究室のみんなは毎日会うから、私達も仲よくなれる。そういうとき、同じ研究室いるのを、本当に大事だと思います」

「やっぱり一緒に長いこといる人とのほうが仲よく話しやすいので。やっぱり研究室にいるということですかね。」

「(研究室に頻繁にいることは)すごく大事だと思います。たぶん、ゼミの日だけ来ると、どうしても話す時間も限られてくるので、ほかの日に来て、時間に余裕があるときのほうが、お互いに話しやすいなと思うので」

「本当に研究室にいるかどうかだと思っていて。それはやっぱりゼミの前とかで、みんながいるときだったりとか。研究室で顔を合わせる回数が多い人は、(話す)回数が増えていっているって感じですかね。」

43

3.2. コミュニケーション機会の創出

【まとめ】

① (研究の邪魔にならない) やり取りが可能な際に行う

② 共食に伴う機会

③ 実験に伴う機会

④ 「研究室にいる」こと

日々の小さな機会の積み重ね

雑談やインフォーマルな活動参加を通して醸成される「信頼・信用」

(ソーヤー2006)

44

3. コミュニケーション機会の特徴

3.1. 研究室の環境

3.2. コミュニケーション機会の創出

3.3. 話題

(インタビューデータから)

3.3. 話題 (研究や学生生活以外)

① 共通の情報や興味

「健康診断はどこで行いますとか。前は同じ寮についてトピックがありませんでした。でも最近寮に入ったので同じ話題があります」

生活情報

「日本のドラマとか芸能人とか、それがきっかけでどんどん話が増えることもあります」

サブカルチャー

「(留学生が)『スラムダンク』が好きだと。バスケットボールがすごく好きだということで、意気投合しちゃって。これは僕の興味があったところに合致して、すごく仲よくなった例ですよ。」

「私にとって一番難しいのはトピックの内容が分からない時です。アイドルとか…」

46

3.3. 話題(研究や学生生活以外)

① 共通の情報や興味

「学部が同じA学科だったので、大変だった授業の話。実習ですごく難しかった、例えばB先生の授業がすごく難しく、今年は特に難しく、何人も落ちたんだよ、みたいなそういう話で盛りあがったりとかというのはあります。

そういう話題性に上がりやすい先生のお互い乗り越えてきたという意味で。

たぶんその実習とかだったら、同じ教官というか、航海士の人に当たっていたりして、その人が面白い人だと、そういう話題で盛りあがったりとかということはずいぶんあります。」

共通の(苦勞)体験

47

3.3. 話題(研究や学生生活以外)

① 共通の情報や興味

「うちの研究室で恋愛の話題が非常に人気です。あと就職活動も人気です。あとは趣味」
「仲良くなりたいたら、当然彼らの興味を先に見つけて。彼らは何が好きですか。」

相手の興味を探り、合わせる

「(親密になりたいなら)きっかけを得たあとは、お互いの共通の話題を見つけ出すというのが(大事)」

「(留学生が好きなものが)『(アニメの名称)』か、みたいな感じで。いつ以来見ていないっけな? みたいな。そこから合わせて行ったというところはあるね」

48

3.3. 話題（研究や学生生活以外）

話題の準備

「キーワードを先に調べたり、発音を確認したりとか、いろいろ事前準備。メモを書いて。私、苦勞していました。そして、万全の確認してから話しかけます。最初は、相手が忙しいかどうか確認します。」

「でも、自分とても興味を持っているとは言えない。ただ話題を探したり。」

「結果がどうなるかはたぶん重要ではない。話したいの行動がちゃんとしたと思います。」

人間関係構築への意思表示

親しい関係構築に
寄与しなかったケース

49

3.3. 話題（研究や学生生活以外）

② 互いの国・文化

「中国の文化について、よく質問が聞かれます。食べ物とか、日中文化祭とか」

「中国語を教えてあげたりすることで、よくなることもあります」

「Aくんの話なんですけど、C国出身なので、池袋にC国料理のお店がけっこうあるみたいで、ぜひおいしいから紹介したいので、一緒に行きませんか、みたいなのはけっこう多かったです」

「Aさん(留学生)自体が日本をすごい好きって言ってくれているので。そういうことで、けっこう話したりはしていました」

「留学生から日本のどこどこへ行ってみたいんだけどとか。よくあったのは、鎌倉とか、近目で行きやすいところだと一緒に行けるので、それもコミュニケーションの1つとしていいのかな」

会話から研究室外の活動に発展するケース

50

3.3. 話題(研究や学生生活以外)

② 互いの国・文化

「出身の国ではこうだけど、日本ではどういう感じなの？ みたいな。それこそ、けっこう結婚式の話が多かったんですけど、例えばC国だと、こういう衣装を着るんだけど、日本ではどういうかたちの、洋装とか和装なのか。お互いの国の違いについて話すといいのかなって思いました。たぶん私自身も、自分の国なら説明しやすいので、知っていることだとお互いに盛りあがるじゃないですけど、話のネタを提供しやすい」

互いの国の文化・習慣の
違いについて

51

3.3. 話題(研究や学生生活以外)

② 互いの国・文化

Aさん(留学生)のそういった研究テーマがございまして。彼の家のこともあって、国家の関係の話をやったりしたいと。それで日本人の学生に意見をぜひ欲しいと。すごい志が高いところがありまして。どうにかしたいというところがあって、留学に来ているというところがありますね。じゃあ次に、なんでそういった研究をしているの？ という話の一環で、(省略:Aさんの国の歴史、環境、民族紛争などと自身の研究との関わりについて)

深い議論をする機会もある
(英語を使用)

52

本日の講演内容

1. 研究の背景
2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係
3. コミュニケーション機会の特徴
4. 研究室で選択されるスピーチスタイル
5. 専門日本語教育への応用

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

【調査方法(調査①、調査③)】

遠隔での半構造化インタビュー(一人1時間半~2時間)

留学生:2021年8月~12月

日本人学生:2021年9月~2023年3月

<質問項目>

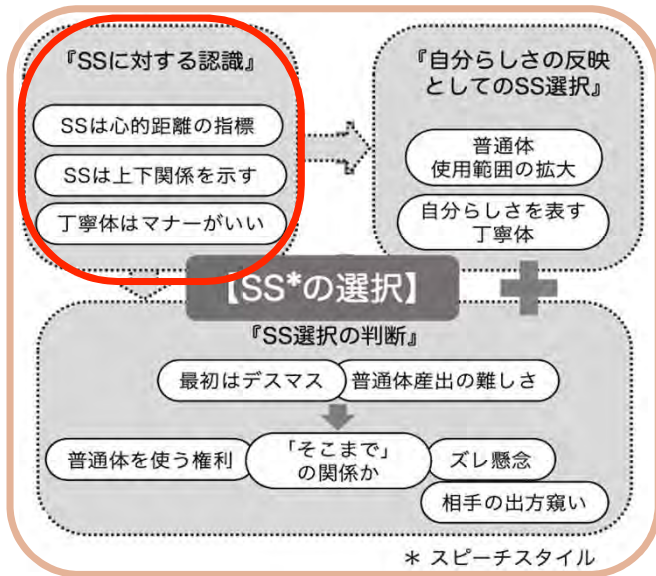
- ・研究室での過ごし方(研究室へ行く頻度、メンバーと話す頻度)
- ・メンバーとのコミュニケーション(雑談の有無、親密さ、理想の人間関係)
- ・日本語のスピーチスタイルの選択

→留学生データ: M-GTAで人間関係構築とスピーチスタイル選択のプロセスを分析
※本発表における日本人学生データは留学生データの分析に追加して示す

54

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

留学生のスピーチスタイル(SS)に対する認識



「SSは心的距離の指標」

「知り合いというだけなら一応デスマス」

「関係が良くなったら、丁寧語から丁寧語プラスタメロ。そういうことになったらすごく距離感の差が感じられます。だから関係が良くなるまでは全部丁寧語で」

→人間関係に合わせたSS

「丁寧語を使うと友達になれるまでは時間がすごく長い。」

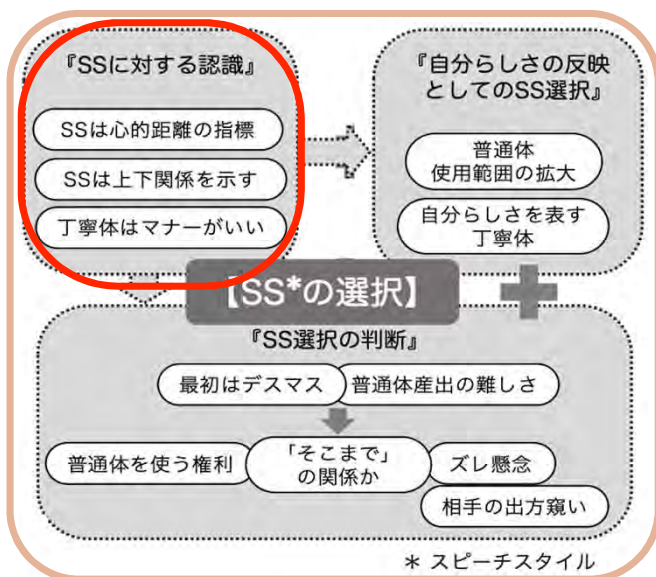
「距離が近くなりたい。この時はカジュアル」

→人間関係に影響を与えるSS

55

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

留学生のスピーチスタイル(SS)に対する認識



「SSは上下関係を表す」

「先輩には丁寧体」(同級生と後輩には心的距離によってSSを選択する)

→先輩に対するSS選択の基準

「(自分に対して丁寧体を)使ってほしくないです。なんか上下関係みたいな、本当に距離感があります」

「私は日本人の学生さんにとって先輩。丁寧の日本語を使うのが正しいと思います。でも、あんまり丁寧に話していなかった」

→自分に向けられたSSの評価

56

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

留学生のスピーチスタイル(SS)に対する認識



「丁寧体はマナーがいい」

「丁寧語はやっぱり礼儀があったり、マナーとしては一番いい話し方。タメ口は友達や家族」

「(丁寧体は)気持ちが良いと話しやすい」

→好印象がある丁寧体

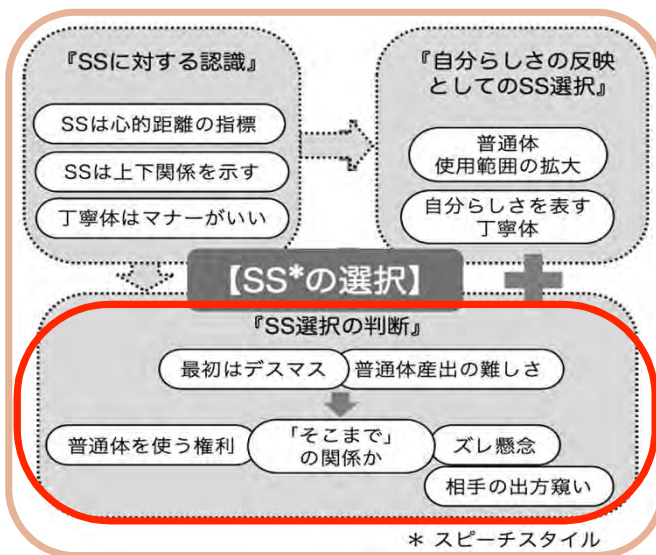
「(日本語の)先生は私たちにいつも教えたのは、デスマスは一番大事ですよ。日本においてそれは基本ですから絶対に使うほうがいい」

→最も基本であるSSは丁寧体

57

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

留学生のスピーチスタイル(SS)選択の判断



「最初はデスマス」

普通体への移行の際に判断するのは…

「「そこまで」の関係か」

(普通体が使える親しい関係?)

「ズレ懸念」

(相手の判断は違う?)

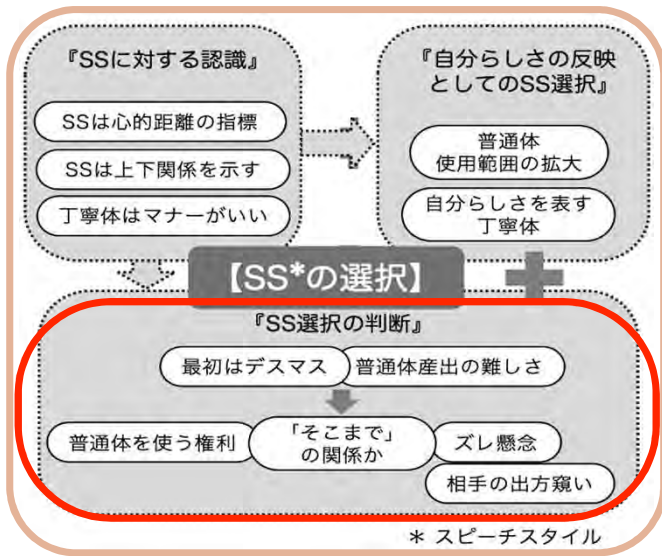
「相手の出方窺い」

(相手は自分に普通体を使う?)

58

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

留学生のスピーチスタイル(SS)選択の判断



「そこまで」の程度が個人間で異なる

親密な関係性がまず必要

「普通」「そんなに良いわけではない」
「関係が良かったですけど、何でも話せるわけではない」

→丁寧体基調を維持

タメロを使える→友達

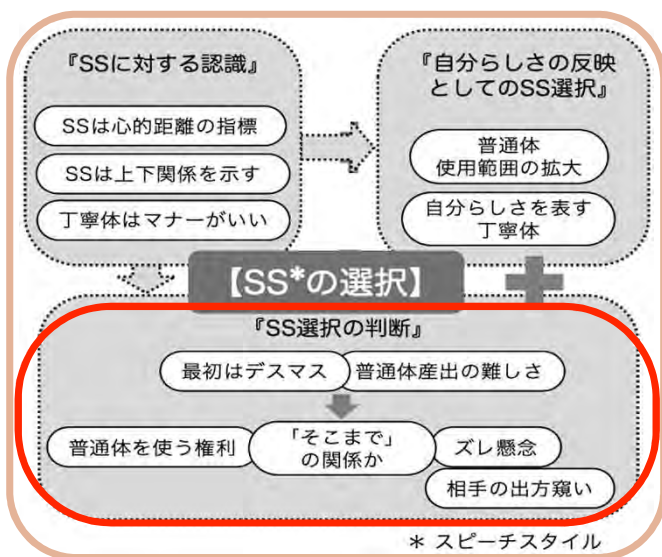
「相手が無意識にタメロを使ったら
その意味は僕たちは友達ですということ」

→普通体に移行

59

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

留学生のスピーチスタイル(SS)選択の判断



「相手の出方窺い」

「相手からデスマスを使わない場合、私も普通で答えたい」

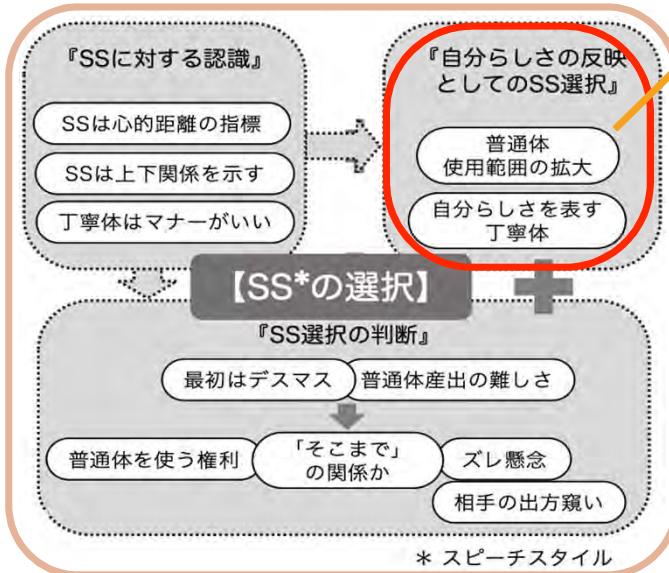
「もし私タメ語を話して、相手がびっくりしました。じゃあまだ丁寧語。相手もタメ語を話します。じゃあ私も同じたぶん大丈夫です」

「私もしよくタメロで聞かれるなら、私はときどきタメロで答えます。マナーとして。わざとあんまり仲がよくなりたくない、そういうイメージを与えたくないので時々丁寧語とタメロ混ぜて答えます」

60

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

自分らしさの反映としてのSS選択



・先輩とも後輩とも普通体使用

「先輩は先にタメロで使って。私は丁寧に答えた後で、「じゃあ～さん、私がですますを使わなくても大丈夫ですか？」

「後輩はみんな僕にずっとデスマスを使う。なんか尊敬しすぎるみたい。先輩と後輩の距離感があって。飲み会とかの時に、彼らにタメロで大丈夫ですよ、私は気にしないって。」

・先輩・後輩の反応

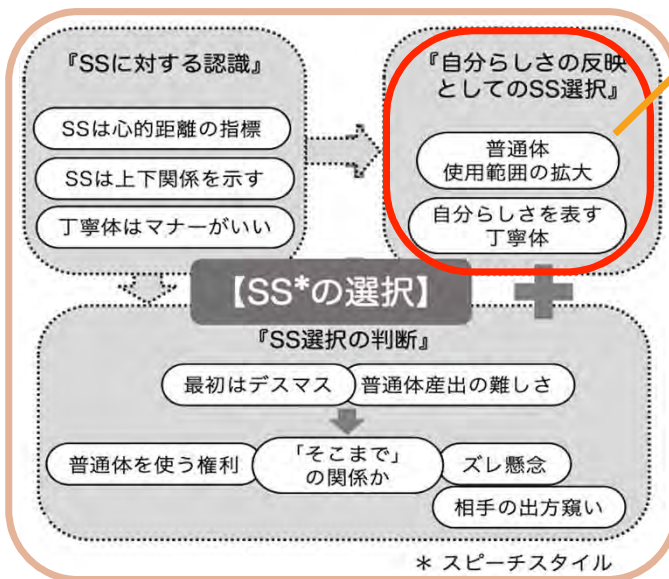
「大丈夫ですよ。だってあなた方は外国人だから。」

「それはダメですよ。あなた先輩だから、そんなタメロ使うことはできないよって」

61

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

自分らしさの反映としてのSS選択



「自分らしさを表す丁寧体」

「普通体はいいと思いますけど、私にはちょっと合わない。タメロで交流する自体が、関係がいいというわけではないと思います。だから丁寧語を使っても、お互いが深くなれば、きっと友達になれます。だから私はやっぱり自分らしく丁寧語を使いたいと思います。」

「丁寧語を使うとやっぱり距離感を感じますね。でも私はそういう距離感が好きです」

「私近づきづらいほうです。クールというか。人間性が。(略) 友達になれる人自体も少ないです」

62

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

まとめ

・普通体使用に慎重な留学生

「そこまで」
ではない

丁寧体を持つ
マナーの良さ

丁寧体に表れる
自分らしさ

「自己呈示」
Goffman 1959

63

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

まとめ

・普通体使用に積極的な留学生

丁寧体が表す心的距離・
上下関係を回避

先輩・後輩とも
使用範囲を拡張

「接触場面では母語話者は
規範意識から解放される」
(伊集院2004)
を利用する形

64

4. 研究室で選択されるスピーチスタイル

まとめ

留学生は自らの希望する関係性に
基づいて会話機会へ参加



構築された人間関係に合わせたSS
自分らしさを反映したSS



スピーチスタイルの選択

自らの希望と周囲からの反応との
折り合いをつけながら、
自らの立ち位置を確立（「開拓」）

65

本日の講演内容

1. 研究の背景
2. コミュニティのメンバーが志向する人間関係
3. コミュニケーション機会の特徴
4. 研究室で選択されるスピーチスタイル
5. 専門日本語教育への示唆

5. 専門日本語教育への示唆

・研究室コミュニティへの多様な参画をサポート

- 1) 研究室の「場」の捉え方
- 2) どのような関係性を構築したいか
- 3) 研究室の状況に即した会話機会の意識化と参加
- 4) どのような話題で、どのような言葉を使ってコミュニケーションを行うか

それぞれの学習者が所属する研究室の状況を理解し、
自らの立場を選択・対処するための枠組みを教室で提供(ケース学習も可?)

67

5. 専門日本語教育への示唆

・研究室におけるコミュニケーション→会話教育

- ・ 短い世間話の始め方・終わり方
- ・ スピーチスタイルの認識(母語場面、接触場面)
- ・ 丁寧体基調を保ちつつ、親密さを表現する会話技術

68

ご清聴ありがとうございました

本研究は下記の科研費の助成を受けて行われました
生天目知美(代表)・大島弥生・居關友里子(19K00733)
「大学コミュニティにおける留学生と日本人学生の待遇コミュニケーション」

調査にご協力くださった研究室や留学生の皆様にご心よりお礼を申し上げます

参考文献

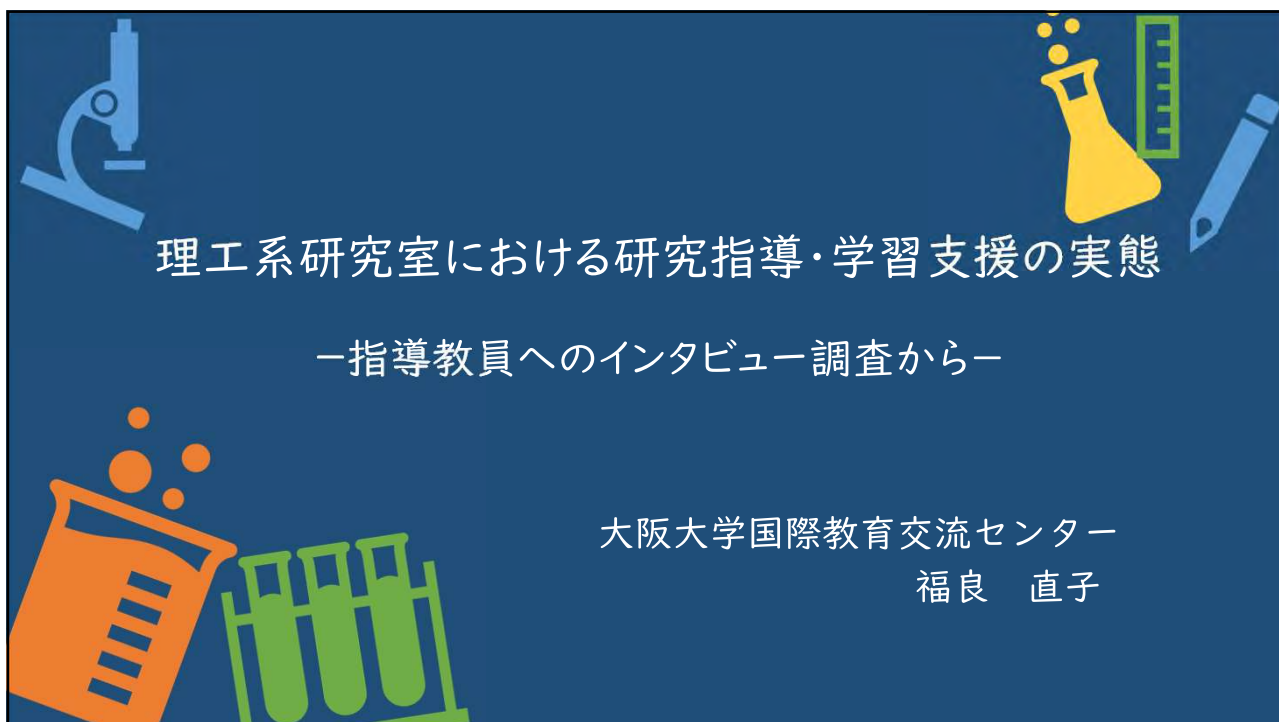
- 伊集院郁子(2004)母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け.社会言語科学, 6(2), 12-26.
井出祥子(1987)現代の敬語理論—日本と欧米の包括へ—.月刊言語, 16(8), 26-31.
井出祥子(2006)わきまへの語用論.大修館書店.
重田美咲(2008)工学系大学院留学生の「正統的周辺参加」と日本語学習, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 57, pp.255-262
ソーヤーリエコ(2006)理工系研究室における装置へのアクセスの社会的組織化, 上野直樹・ソーヤーリエコ(編), 文化と状況的学習, pp.93-126, 凡人社
ソーヤー理恵子・三登由利子(1998)工学部研究留学生の日本語使用実態調査—既習者向け日本語研修コース修了生と研究室の日本人へのインタビュー調査から—.多文化社会と留学生研究:大阪大学留学生センター研究論集, 2, 63-76.
羽吹幸・篠原亜紀(2014)理工系大学院留学生の日本語使用に関する一調査.国際交流基金日本語教育紀要, 10, 131-144.
村岡貴子(2003)日本の理系大学院で学ぶ留学生の専門日本語コミュニケーション, 社会言語科学, 6(1), pp.99-111
村岡貴子(2017)「東アジアを中心とした専門日本語教育の実践拡大と研究開発の可能性—研究者間の連携・協働の強化を目指して—」(パネルディスカッション『日本語教育を核とする異文化相互理解教育・国際連携教育の開発に向けて』)『第18回東アジア国際日本語・日本文化フォーラム予稿集』pp.13-14, 九州大学, 2017.2.4.
三牧陽子(2002)待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—.社会言語科学, 5(1), 56-74.
三牧陽子(2006)大学コミュニティにおける留学生のコミュニケーションに関する研究, 平成14年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号14580329研究成果報告書
三牧陽子(2010)研究場面における対面コミュニケーション能力養成に向けて:「参入する研究コミュニティを知る」アクティビティ, 多文化社会と留学生交流:大阪大学留学生センター研究論集, 14, pp.41-48
Goffman, Erving (1959)The Presentation of Self in Everyday Life. New York: Doubleday.
Malinowski, B. (1923) The problem of meaning in primitive languages, In Ogden, C. & Richards, I. (Eds.), The meaning of meaning, pp.296-336, New York: Harcourt, Brace (石橋幸太郎(訳), 意味の意味, 新泉社(1967))
Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973) Opening up closings, Semiotica 8 (4), pp.289-327

発表 1

理工系研究室における研究指導・学習支援の実態
—指導教員へのインタビュー調査から—

福良 直子

国際教育交流センター 講師



発表内容

1. はじめに：研究背景と本発表の目的
 2. 先行研究と本発表の位置づけ
 3. 調査の概要
 4. 分析方法
 5. 結果と考察
 6. まとめと今後の課題
- <付記>
<参考文献>

※なお、本発表の内容は、主に福良（2021, 2024）に基づくものである。



1. 研究背景と本発表の目的 ①

日本の大学院における研究指導体制 有川 (2017)

近年の留学生政策等の議論…留学生受け入れや派遣に関する議論

留学生指導体制が議論されることは殆どない

⇒ **ミクロレベルでの留学生に関わるケース**を通して日本の大学院における研究指導体制の課題を明らかにしている

例) 教員の学生への研究指導における責任と負担

研究室において学生間で学ぶシステムへの依存

学生に期待される「望ましい」行動と評価

研究室単位を超えた教育研究指導体制の可能性

⇒ **マクロレベルでの大学院教育改革の議論や改善に向けた取り組みにつなぐことが重要**

3

1. 研究背景と本発表の目的 ②

・理工系研究室におけるコミュニケーションを対象とした研究

(村岡2003, 重田2008, 居關・生天目2023, 生天目・大島・居關2024等)

研究室構成員との良好な関係構築、維持 ⇒ **留学生の日本での円滑な研究活動**

・理工系分野の留学生の研究生活に関する論考 (藤田2023)

日本語能力がJLPTのN2レベル…日本語による意思疎通、研究指導、議論に大きな問題なし

N2レベル未満の場合…意思疎通が困難なケースも

⇒ 日本語が中級(N2)未満の段階で共同研究を始める学生も多い。
実験などで長時間の拘束があり、日本語学習には時間的制約がある。

4

1. 研究背景と本発表の目的 ③

理系研究室において、学生が博士進学を決断するまでの過程（岡本2024）

学生にとって理系研究室が「聞ける環境」（周囲からのサポート・世話役の存在）であることが鍵

⇔ 「聞けない環境」

- ・大学の理系研究室では、誰もがみな研究は思ったほどうまくいかないという現実に直面する。その現実を乗り越えるには、「研究室の一員として受け入れられている」ことが必須
- ・研究室内で周囲からサポートを受けることで、知識や情報などへのアクセスが保証され、その研究室に受け入れられているという実感につながる。そのような環境で、研究者としての自身の適性を吟味し、研究者を目指し続けるべきかを検討する。

5

1. 研究背景と本発表の目的 ④

理工系研究室に所属する留学生が日本で円滑に研究生活を送るためには所属研究室の環境や各種サポート等の関与が重要な役割を果たすと考えられるが、その実態は十分には明らかにされていない。

<本発表の目的>

留学生によるプレゼンテーション（以下適宜プレゼン）に着目し、理工系研究室の教員へのインタビュー調査により、理工系研究室における研究指導、学習支援の実態の一端を明らかにする。

研究室というコミュニティの実状を知ることで、専門日本語教育としてのプレゼンテーション教育に何が求められているのかを探り、教育方法への示唆を得る。

2. 先行研究と本発表の位置づけ ①

大学教育におけるプレゼンテーション能力育成の重要性

「初年次教育プログラム」を実施している大学における具体的内容
プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表

2009年度: 67% → 2022年度: 86%

日本で就職した元留学生への調査(菅長・中井 2015)

- ・各自の専門分野での論文執筆や研究発表の経験が、論理的な思考能力やプレゼンテーション能力の獲得につながる。
- ・それらが社会での実務にも活かされていることを示した。

⇒ 留学生対象のプレゼンテーション教育関連の文献調査(福良・横川2021)
「実践報告」と「評価」に関するものが多く、具体的なアカデミック能力
養成に関する研究成果は限定的。

7

2. 先行研究と本発表の位置づけ ②

Ginkle他(2015)

高等教育におけるプレゼン能力育成について、能力の向上は、高等教育における必須の目的であるにもかかわらず、効果的な学習環境の特徴については、包括的に把握されていないと指摘。

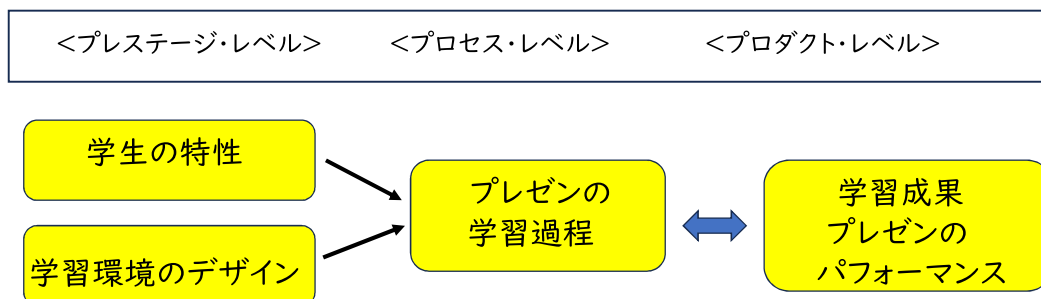


図1 高等教育におけるプレゼンテーション能力開発の枠組み(Ginkel他に基づき作成)

8

2. 先行研究と本発表の位置づけ ③

- ・本発表では、この枠組みを援用し、**学生の特性、所属研究室の環境や各種支援等の関与**を調査し、その結果はプレゼン教育の内容・方法の開発に反映できるものと考ええる。
- ・理工系研究室では、レポート・レジユメの作成、及びゼミでの議論など、プレゼン完成前後に**種々の研究活動が行われるため、それらとの関連性も含め考察する。**

9

3. 調査の概要

実施時期	2022年11月～2023年7月
調査協力者	関西地区の某国立大学、理工系研究室所属の教員4名 (教員A、B、C、Dとする) ※所属留学生数 A研究室:2名、B研究室:8名、C研究室:5名、D研究室:2名 (研究生、博士前期、後期課程)
調査方法	事前のアンケート調査に基づき、オンライン(zoom)によるインタビューを実施
調査項目	留学生が行うプレゼンの種類、使用言語、プレゼンに対するサポート、サポートの際の困難点、留意点、日本語が中級レベル未満の留学生に対する留意点

10

4. 分析方法

- ・インタビューは、録画およびICレコーダーによる録音を行い文字化
- ・質的データ分析法：帰納的アプローチ
焦点的コーディングにより、文字化したデータをセグメント化
事例コードマトリックスを作成し、各項目の特徴を分析

⇒ 縦軸：事例
横軸：コードを配置したマトリックスを作成することで
コードを整理
データの意味やテーマを見出し、解釈する
※ 以下考察では、適宜セグメントの要約を示す。

11

5. 各研究室における留学生のプレゼンに対する構成員の関与

<留学生のプレゼンへのサポートに関する構成要素>

研究進捗状況の把握、日本語能力と目的に応じた使用言語の選択、研究の独創性、研究理念への意識化、論理的思考力の不足、議論の積み重ねによる論理的思考力の涵養、学生同士のサポート



12

5.1 研究室における種々の活動

研究進捗状況の共有

学生全員が研究の進捗状況を毎週報告（口頭／研究室Webページへの書き込み）

構成員間のコミュニケーション促進

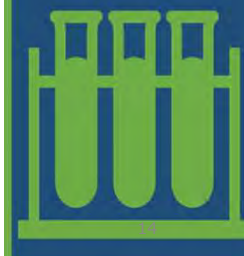
- ・ 学生のみでのミーティングを実施（過去には教員主導）
 - ・ 研究室のスケジュールの確認：「フォーマルでアカデミックな活動」
 - 研究室の掃除：「フォーマルでノンアカデミックな活動」（ソーヤー, 2006）
 - ・ 学生によるショートスピーチ（好きなアニメ、本、旅行等自由なトピック）
- ・ 研究室でのさまざまな行事への参加の促進：「日本語で話すべき機会」（懇親会、歓迎会、卒業パーティー、文化祭での研究紹介等）

【研究の進捗状況悪化】 ⇒ 【不登校による状況の悪化】 ⇒ 【留年につながる負のサイクル】を未然に防ぐ

13

5.2 研究室における言語使用

- ・ 発表、レジュメともに日本語と英語を併用。留学生に対しては、日本語の到達度に合わせてコミュニケーション。
（教員A）
- ・ 日常的に日本語が飛び交う環境。発表やレジュメは基本的に英語だが、日本人学生には「微妙なニュアンスが通じない」ため、博士後期課程の学生や日本語が少し話せる留学生がコメントをして理解を助ける。
（教員B）
- ・ 留学生の場合、レジュメも発表も英語だが、指導は日本語を使用することもある。
（教員C）
- ・ 留学生本人の語学力に合わせて、英語または日本語を使用。
（教員D）



5.3 プレゼン指導において重視する点と問題点 ①

<教員がプレゼン指導で重視する点>

- ・研究者としてのこだわり
- ・研究の理念、ビジョン
- ・研究のメリット、オリジナリティ、価値
- ・スライドの構成、価値の高いデータ

<プレゼンに関する学生の問題>

- ・「承」（過去の研究における問題点の指摘と考察）がない
- ・「データ・グラフをそのまま並べる」= プレゼンであると勘違い
- ・グラフの作成意図、提示意図が不明
- ・ロジックがわかっていない

「研究の独創性」、「研究理念の明確化」を重視、意識化
⇒ これらの欠如の指摘、論理的思考力の涵養を目指す
他の学生とのコミュニケーション不足

15

5.3 プレゼン指導において重視する点と問題点 ②

<教員A>

プレゼンでもっとも重要なことは、何をもっとも主張したいのか「**自分はここはやったんだぞ**」という**研究者としてのこだわりを表現すること**である。日本人か留学生かに関わらず、その点への意識化を促す指導をしている。研究で最も大切なことは、起承転結の「承」であり、過去の研究における問題点の指摘と考察に自分の研究が活かされる。

客観性がなく、自己中心的に研究を進める学生は、日本人か留学生かに関わらず、学会発表等でも起承転結の「起」から突然「転」に飛躍してしまう。

16

<教員B>

発表全体を貫く研究の理念、ビジョンの明確化が重要である。ビジョンの明確化には、先行研究の徹底的な調査が必要で、分野の「穴」を調べるのが第一歩である。新しい大きな研究の潮流となり得る理念、ビジョンを考えさせるようにしている。

「データ、グラフをそのまま並べる」ことを発表すると勘違いしている留学生に対する初期指導のエネルギーが最も必要である。
日本人学生とのコミュニケーションが不足しているため、得られたデータのまとめ方がわからず、自分だけで完結してしまう傾向が見られる。

17

<教員C>

プレゼンは、自分の研究のメリットやオリジナリティをいかに強調できるかが重要である。研究の価値が伝わらなければ、その後の論文投稿につながらない。

自分の研究のオリジナリティが話せない学生が多い。
図の作成・提示意図が不明である場合が多い。

<教員D>

プレゼンは、内容がもっとも重要である。スライドの構成と価値が高いデータがあれば、あとは枝葉末節である。
スライドの順番はロジックであるため、まずそこを見て指導する。

ロジックが分かっていない学生は、図そのものの問題に加え、提示する順番にも問題がある。

18

5.4 指導の具体的取り組み ①

ゼミでは、**学会発表を想定しストーリーを持ったわかりやすい研究紹介を目指した指導**を心がけている。研究分野が異なる他者への自身の研究内容の伝達は困難であるが、それは「研究者として求められる能力」である。このような他者に簡潔に研究紹介ができる能力は、就職活動等のキャリア形成にも有効であり、研究室での訓練により涵養される能力である。 (教員A)

学生による、さまざまな考え方が入った**コンセプトマップの作成**により、研究の理念の確認をした上で、**細かい部分のディスカッションの繰り返し**を行う。
「幼稚な絵」から始まり、どんどん進化していくコンセプトマップが「学生の羅針盤」となっていく。 (教員B)

19

5.4 指導の具体的取り組み ②

研究を始めたばかりの頃のプレゼンの個別指導は**相当な時間**を要する。
図の作成、提示意図の明示化、箇条書き等簡潔な表現によるスライド作成方法の指導を行う。
学生による図の作成、提示意図が不明であることが多いため、「**一言一言しゃべって聞くしかない**」 (教員C)

語学力が低くても、ロジックが分かってる人、論理的思考力が高い人は、**議論の積み重ね**によって、お互いに考えていることがわかるようになる。
しかし、論理的思考力は、なかなか伸びず、その獲得は非常に難しい。 (教員D)

⇒ 「論理的思考力」の涵養には、議論の繰り返し、積み重ねが必須

20

5.5 指導上の困難点 ①

- ・留学生を指導する際に、伝わる指導内容のレベルが留学生と教員の語学力レベルの差に左右される。シンプルな指示は問題ないが、**研究内容に関する表現の細かいニュアンス**は、伝わらない。
- ・**プレゼンの論理のつながり**を伝えることも難しい。
- ・指導は、お互いがわかる言葉を使い、**ひたすら言うしかない**。（教員D）

21

5.5 指導上の困難点 ②

<教員Dの語り>

日本語でもその違いが分からない人はいますからね。仮説と分かってること。AだからBだよって言っても、それが本当にconfirmされて、カチッと固まった事実なのか、枠組みだけを示して、中はちょっとこれからです、みたいなのと、全然違うじゃないですか。

それはひたすら言わないとしょうがないですよ。こっちの知ってる言葉と、お互いがわかる言葉を使って。でも、通じてるかどうか怪しいとは思いますが。

繰り返し議論していくしかないですよ。確定したことじゃないんだ、みたいなのを何となくでもいいからわかってもらわないといけないので。

22

5.6 「学生によるサポート」の促進 ①

自主的に研究を進めることが難しい学生に対しては、その学生と研究テーマの近い学生にサポートの依頼や提案をする。
(教員A)

自己流で研究を進める学生に対して、より知識や経験のある学生に助けを求めるよう提案する。
留学生と日本人学生で得意分野が異なるため、相互サポートができるよう促す。
(教員B)

⇒ 教員は各学生の能力や特性を見極めた上で、相互にコミュニケーションが図れるよう、ファシリテーターとして学生同士のサポートを促進している

23

5.6 「学生によるサポート」の促進 ② <教員Bの語り>

教員B: ただ、彼ら(※注:留学生)得意なのは、ぱーっと見た時にストーリーがきちんとつながってるかどうかというのは得意なので、そこはちょっと見てもらうようにしています。(中略)
逆に日本人の学生さんは、どっちかいうたら、その大きな大局を見るのがちょっと苦手な人が多いので、だからちょっと細かいところの修繕してもらうっていうようなことをやったりしています。

聞き手: それぞれ得意分野が違うってということなんですね。分かりました。

教員B: 僕は、そばでにやにやしながら見てるっていう役割です。

聞き手: にこにこではなく、にやにや。(笑い)

教員B: にこにこやない、にやにやしてるっていう。そう来たか!とかいうような。

24

5.7 学生同士の自主的なサポート

教員よりも気軽な学生のサポートでは、発表練習や学生間での日本語の確認、修正が日々行われている。修士論文発表会前の自主的な助け合いも見られる。特にAPにおいてスライドの見やすさは重要であるため、グラフの見やすさなどは自主的な情報交換をしている。 <教員A>

オフィシャル以外にも、学生同士の自然発生的なサポートが行われている。 <教員B>

日本人学生同士、留学生同士のさまざまな話し合いがなされている。 <教員C>

25

学生同士のサポートが見られないケース <教員Dの語り>

やっぱり自分が研究室20人の中に1人だったら、私1人だけで先生ばかり行くのも難しいなってなるんだけど、今は研究室がちょっとちっちゃくなって、10人で3人とか4人だったら、もう別にみんな行ってるからええやろ、みたいになってきますし。

20年ぐらい前とか、10年ぐらい前まで。これは私の研究室の例なんですけども、要は留学生が少ない時、1人しかいない時とかは、嫌でも日本語しかしゃべれないので、しゃべれるようになる。今は留学生がたくさんいるし、留学生同士、学科とか研究科に留学生がいるので、そっち同士で固まってしまうので、逆になかなか覚えられない。よしあしですね。痛しかゆして、しゃべれなくても孤立感を感じずに、研究室で、英語で研究だけすれば、あとは母国の人同士で、母国語でご飯を食べに行ったり、遊びに行ったりできるので、過ごしやすいのかもしれないんですけども、どっぷり浸かってってということではないんですね。研究室にもよりますね。

26

学生同士のサポートが見られないケース

教員Dの研究室では、**教員による直接指導が主**である。
先輩学生からのサポートや学生同士のサポートは、以前はあったが
現在はほとんど見られない。

留学生が研究室に占める割合の変化

同国人のネットワーク形成による**日本語使用の必要性の低下**
教員へ直接質問することへの**心理的負担の軽減**

27

5.8 日本語が中級未満レベルの学生へのサポート

- ・ 発表台本の作成 ⇒ 日本語および発表内容の修正
2～3回推敲
- ・ 台本の音読練習指導 (教員A)
- ・ 言葉で伝わらない場合は、指導内容を描いた絵を渡す
「残るような形」 (教員B)

<教員Aの語り>

台本は基本的には書かすようにしてるんですよ、一番最初とか2番目の発表に関しては、日本人に関しても書かすようにしてるんですよ。ですから日本語に慣れてない人はなおさら（中略）日本語の間違いもそうですし、こういう言い回しは**しませんよ**っていう、先ほどの話にもありましたけども、そういうところは修正をして、**なおかつ発表内容に関しても同時に見る**というふうなことはしてます。



28

6. まとめと今後の課題 ①

研究室における関与

- ・ 教員による直接的な指導
(研究の独創性と研究理念の明確化の重視、議論の積み重ねによる論理的思考力の涵養)
- ・ 教員はファシリテーターとして、学生同士のサポートの促進
- ・ 日常的、自主的、自然発生的な学生同士の学び合い
- ・ 留学生の日本語能力を把握した上で目的に応じて使用言語を選択
- ・ 学生同士のコミュニケーションの活性化
- ・ 日本語が中級レベル未満の留学生に対するサポート
(発表台本の作成、台本の音読練習、指導内容を絵に描いて残す等)

29

6. まとめと今後の課題 ②

<専門日本語教育として>

研究室というコミュニティへの留学生の十全な参加のために…

- ・ 専門日本語教育としてのプレゼン教育を通して、プレゼン完成までの過程で必要なサポートや学び合いへのより円滑なアクセスを促すことが重要である。
- ・ 研究生活での時間管理、修了までのプロセスの認識
- ・ ディスカッションを重ねることの重要性および他学生とのコミュニケーションの重要性への意識化
- ・ いつ、どのように、何を学ぶべきか、その方向性や選択肢を共に考える

<今後の課題①>

理工系研究室に所属する留学生、日本人学生への調査を進め、研究室での種々の関与を学生の視点から捉えることが必要。

30

6. まとめと今後の課題 ③

ミクロレベルでの留学生に関わるケースを通して明らかとなった日本の大学院における研究指導体制の課題
⇒マクロレベルでの大学院教育改革の議論や改善に向けた取り組みにつなぐことが重要（有川 2017）

本研究で明らかとなった各研究室の研究指導、学習支援の実態
現在の体制が確立されるまでのプロセスは、教員の葛藤も含めモデルケースとして、日本語教育関係者のみならず、留学生教育に携わる教職員にとって、教育資源となると考えられる。

<今後の課題②>

- ・研究室を対象としたケーススタディの蓄積とその研究成果の活用

31

<付記>

調査にご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、JSPS科研費22K13145の助成を受けたものです。



32

参考文献

- 有川友子(2017)「日本の大学院における教育研究指導体制の問題ー理工系大学院留学生を研究室にて指導するある日本人教員のケースを通して考えるー」『留学生交流・指導研究』Vol.20, pp.7-16
- 居關友里子・生天目知美(2023)「理工系研究室におけるコミュニケーションの実態ー交感的コミュニケーションに注目してー」『専門日本語教育研究』第25号, pp.27-34
- 太田亨・安龍洙・村岡貴子・門倉正美編(2023)『日本で学ぶ理工系留学生 教育・研究・留学生活』ココ出版
- 岡本沙知(2024)「研究者はどのような研究室で育つのかー大学の理系研究室を対象としてー」『科学教育研究』48巻2号 pp. 87-106
- 佐藤郁哉(2008)質的データ分析法ー原理・方法・実践』新曜社
- 重田美咲(2008)「工学系研究室における博士課程留学生の生活調査」『専門日本語教育研究』第10号, pp. 35-40
- 重田美咲(2008)「工学系大学院留学生の「正統的周辺参加」と日本語学習, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 57, pp.255-262(2008)
- 管長理恵・中井陽子(2015)「理科系ベトナム人国費留学生のキャリア形成ーグローバル人材に必要な資質ー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第41号, pp.29-45
- ソーヤーリエこ「理系研究室における装置へのアクセスの社会組織化」上野直樹・ソーヤーリエこ編著『文化と状況的学習 実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン』凡人社
- 卓妍秀(2023)「理学系留学生の主體的学びを促すURAの支援 留学生の研究活動に必要とされる日本語学習支援とは」村岡貴子編『大学院留学生への研究支援と日本語教育ー専門分野の違いを超えてー』第4章, pp.59-82, ココ出版

33

参考文献

- 生天目知美・大島弥生・居關友里子(2024)「理系研究室における人間関係構築とスピーチスタイル選択」『社会言語科学』第26巻第2号, pp.19-34
- 仁科浩美(2018)「学生のプレゼンテーション時における回答困難な質問への対応」『工学教育』66巻2号 pp.18-23
- 福良直子(2021)「留学生の母国でのプレゼンテーション教育に関する調査ーカリキュラム開発への基礎研究ー」『専門日本語教育研究』第23号, pp.67-74
- 福良直子・横川未奈(2021)「日本語初級から上級までの体系的なプレゼンテーション教育方法開発のための基礎研究ー2015年から2020年に刊行された文献の調査からー」第23回専門日本語教育学会研究討論会誌, pp. 14-15
- 福良直子(2023)「留学生への日本語プレゼンテーション教育 研究室と日本語教育を結んで」村岡貴子編『大学院留学生への研究支援と日本語教育ー専門分野の違いを超えてー』pp.37-56, ココ出版
- 福良直子(2024)「留学生によるアカデミックプレゼンテーションに対する理工系研究室におけるサポートの実態」『専門日本語教育研究』第26号, pp.11-18
- 藤田清士(2023)「理工系分野の教育の特徴と留学生の留学生活」太田亨・安龍洙・村岡貴子・門倉正美編『日本で学ぶ理工系留学生 教育・研究・留学生活』pp.203-217, ココ出版
- 村岡貴子(2003)「日本の理系大学院で学ぶ留学生の専門日本語コミュニケーション」『社会言語科学』第6巻第1号, pp.99-111
- S.V.Ginkel, J.Gulikers, H.Biemans, M.Mulder. (2015). Towards a set of design principles for developing oral presentation competence: A synthesis of research in higher education, *Educational Research Review*, Vol.14, pp.62-80.

34



発表 2

学際融合クラス「上級専門日本語アカデミック・コミュニケーション」の教育実践

瀬井 陽子

国際教育交流センター 特任助教



学際融合クラス 「上級専門日本語アカデミック・コミュニケーション」 の教育実践

第17回大阪大学専門日本語教育研究協議会
2025年2月18日（火）

大学の研究室コミュニティで見られるコミュニケーションの諸相
ー理工系研究室の留学生の事例分析から専門日本語教育学習支援を再考する

瀬井陽子



科目名の用語について

上級専門日本語アカデミックコミュニケーション

CEFR能力記述のB2レベル以上。

自身の専門領域の話題を含めて、具体的及び抽象的な複雑なテキストの主要点を理解することができる。
相互にストレスのない形で、十分に流暢かつ積極的に参加して母語話者と通常の相互行為ができる。

1,000字程度の漢字を使いながら、広範なテーマについて詳細な議論が書ける。

また、課題に関してさまざまな選択肢の利点や不利点を挙げながら見解を述べるができる。

（日本語プログラムレベルチェックより）

科目名の用語について



上級専門日本語アカデミックコミュニケーション

専門日本語教育：

時間に制限のある留学生が、研究活動を円滑に遂行するためという日本語学習の目的を自覚していることを前提とし、その目的達成のために行われる日本語教育である

(村岡 2023)

3

科目名の用語について



上級専門日本語アカデミックコミュニケーション

一般に論文や専門書の出版、学会・研究会での報告などを指し、さらに教育やアカデミック・コミュニティにおけるさまざまな役割を担って活動していくこと

(谷本 2018)

4

上級専門日本語アカデミックコミュニケーション

授業内容

(1) 研究テーマに関する話題提供

- ・1人が話題提供者となりディスカッショントピックを提示
- ・グループディスカッションを実施



(2) 研究テーマに関するポスター発表



5

発表内容



1. 大学院留学生を対象とした「学際融合科目」の説明
2. 受講生に理工系の学生が多い背景
3. 「上級」「専門日本語」「アカデミックコミュニケーション」
これらのキーワードを繋ぐ授業デザイン
4. 授業における教育実践
5. まとめ

6

1. 学際融合科目について（大学内の位置づけ）

大学院共通教育科目のようなもの（単位あり）

- ・横断型教育（研究科等の枠にとらわれない、複眼的視野を養うための学際融合教育）の充実を目指す
- ・全研究科大学院生を対象に多様な組織が提供 （大阪大学ウェブサイトより）

- ① 専門分野以外の知識や能力を養い、もう一步社会につながる知に発展させることができる
- ② 自分とは異なる専門知識を持つ学生と交流できる

科目例：

- ・データ科学と意思決定
- ・学術的文章の作業とその指導
- ・研究方法とアウトリーチのデザイン

7

1. 学際融合科目について（留学生対象日本語プログラム）

	入学前	入学後
学部生レベル		<ul style="list-style-type: none"> ①共通教育科目日本語 ②学部英語コース日本語
大学院生レベル (研究生を含む)	<ul style="list-style-type: none"> ③日本語集中コース 	<ul style="list-style-type: none"> ④留学生日本語選択コース ⑤学際融合教育科目日本語
短期留学生 (学部・大学院)	<ul style="list-style-type: none"> アカデミックライティング アカデミックリーディング アカデミックコミュニケーション 	<ul style="list-style-type: none"> ⑥国際交流科目日本語 ⑦J-ShIP（夏・冬）プログラム日本語 ⑧超短期プログラム日本語

3. 上級専門日本語アカデミックコミュニケーション科目

英語で論文執筆をする受講生の声



- ・入試の際に日本語能力は問われていない（英語の試験のみ）
- ・日本語学習は独習の場合あり
- ・論文執筆は英語
- ・ラボ（研究室）内のコミュニケーション言語は英語と日本語

文部科学省による2009年「国際化拠点整備事業」、2014年「スーパーグローバル大学創成支援」を受け、大阪大学でも英語学位プログラムが設置された

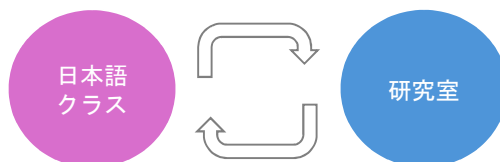
11

3. 上級専門日本語アカデミックコミュニケーション科目

日本語の授業の意義は？ このクラスで何を目指せばよいか？

全受講生共通

1. 研究活動を遂行する
2. 研究成果を発信する
3. 研究者仲間のコミュニティに参画する



12

3. 上級専門日本語アカデミックコミュニケーション科目

日本語の授業の意義は？ このクラスで何を目指せばよいか？

日本語
クラス

- ・ 日本語を使う経験を積む
- ・ 日本語で様々な話題を取り上げる
- ・ 自分の研究内容を日本語で説明する
- ・ 自分の研究の学術的、社会的貢献を日本語で説明する
- ・ 自分の研究内容についてまとめた文章を発表する
- ・ 自分の研究内容についての質問に答える

多分野の大学院生が集まる場であることも活かした活動

13

3. 上級専門日本語アカデミックコミュニケーション科目

授業の位置づけを明示的に伝えた

- ・ 研究室内のコミュニケーション
- ・ 日本の学術コミュニティへの参加
- ・ 異なる分野の専門家との交流
- ・ 将来のため（アウトリーチ活動）
のための日本語を学ぶ場である

これからの時代において、専門分野の異なる研究者による「科学技術コミュニケーション（小林 2007）」が重要になることも説明



大阪大学・京都大学 STiPS (2018)

14

3. 上級専門日本語アカデミックコミュニケーション科目

具体的な授業内容

【前半】自分の研究キーワードに関する話題提供

- ・話題提供者からの説明とディスカッショントピック提示（5分）
- ・グループディスカッション（約20分）
- ・ディスカッション内容をクラスに共有（約10分）



【後半】研究テーマに関するポスター発表

- ・時間は約40分
- ・聞き手は質問をする



15

3. 上級専門日本語アカデミックコミュニケーション科目

授業スケジュール

回	授業内容	回	授業内容
1	オリエンテーション	9	話題提供とディスカッション（4）
2	話題提供とディスカッション（導入）	10	話題提供とディスカッション（5）
3	話題提供とディスカッション（準備1）	11	ポスター発表（導入）
4	話題提供とディスカッション（準備2）	12	ポスター発表（準備1）
5	話題提供とディスカッション（準備3）	13	ポスター発表（準備2）
6	話題提供とディスカッション（1）	14	ポスター発表（1）
7	話題提供とディスカッション（2）	15	ポスター発表（2）・まとめとフィードバック
8	話題提供とディスカッション（3）		

4-1. 話題提供の活動について



導入として受講生に伝える内容：

学際融合科目で養うことができる能力

研究者として求められること

- (1) 現実感覚：企業、社会において解決が求められている問題を知る現実感覚
- (2) 哲学：現代社会における経済的・社会的・政治的・国際的な背景や潮流を捉え理解することが必要
- (3) ディシプリン：それぞれの学問分野に蓄積された知識や方法などの規律に基づいているか。複雑に絡み合った現象を捉えるための学際的研究
- (4) 方法：当該研究に適切な研究方法を習得し、スキルを高める
- (5) 論理的思考：論理的な思考、批判的な思考
- (6) 倫理：研究、論文作成に当たって不正行為を行わない

谷本（2018）「どのようにアカデミック・コミュニケーション能力を高めるか（p. 73）」より

17

4-1. 話題提供の活動について



導入として受講生に伝える内容

学術論文に必要な問い

- (1) 誰に：誰に読んで／聞いてもらいたいか。
- (2) 何を：何を伝えたいのか。あなたの貢献はどこにあるのか。
それは「誰に」の問題とも関わる。
- (3) なぜ：なぜそれを主張したいのか。それはまた「誰に」に関わる。
- (4) どのように：自分の考えていることが学界や実務界にどのような意味があるのか。それはまた彼らに伝わる「言葉」だろうか。

谷本（2018）「どのようにアカデミック・コミュニケーション能力を高めるか（p. 69）」より

18

4-1. 話題提供の活動について



レジュメ例

タイトル・名前・キーワード

1. 研究分野の概要
2. 重要な一冊／人／キーワード
3. 2. と自分の研究との関係
4. ディスカッションポイント

参考文献



4-1. 話題提供の活動について



目的

- ・自分の研究分野を簡潔にクラスメイトに紹介
- ・研究テーマに関するディスカッショントピックを考え、社会との接点を探り、クラスメイトとディスカッションをする

方法

- ・A4サイズ1枚のレジュメを作成
- ・レジュメは事前にクラスメンバーが閲覧可能な掲示板に提出
- ・クラスメイトはレジュメを事前に／当日読みながら発表を聞く

4-1. 話題提供の活動について



準備1

- (1) 研究のキーワードを考える（1つまたは2つについて簡単に説明できるように）
- (2) 自分の研究のタイプについて考える：検証型、複合型、論証型どれか

準備2

- (1) 研究（分析）方法について説明する
- (2) 研究動機、研究背景について説明する

準備は、3~4人のグループで話しながら進め、グループメンバーから質問が出れば説明方法を工夫する

準備3

- (1) 自分の研究分野で前提とされている知識・理論について話す
- (2) 発表予定の「ディスカッションポイント」について、説明が必要か、ディスカッションがしやすいか検討する

4-1. 話題提供の活動について

準備段階で、聴衆に伝わる「言葉」を意識的になる

例えば…

略称	英語名	日本語での呼び方
LFA	Lateral Flow Assay	ラテラルフローアッセイ
BED	Binge Eating Disorder	ビンジ様過食障害
BLA	Basolateral Amygdale	扁桃体基底外側核
EMT	Epithelial-to-Mesenchymal Transition	上皮間葉転換
PC	Prestressed Concrete	プレストレスト コンクリート
ESG	Environment, Social, Governance	環境、社会、ガバナンス（企業統治）を考慮した投資活動や経営・事業活動

研究室内では略称が通じるが、研究室外では日本語訳を伝えても分からない

4-1. 話題提供の活動について

話題提供の発表当日

- ・ 話題提供者からの説明とディスカッショントピック提示（約5分）
- ・ グループディスカッション（約20分）
- ・ ディスカッション内容をクラスに共有（約10分）

わからない用語があれば、質問を通して

研究対象（物質・材質・現象・薬品・制度・コミュニティなど）

研究方法（方法・機械・実験用具・プログラムの名前など）の情報を明確にする

何を対象に、どのような研究をして、何が得られるのか、を把握する

23

3. 上級専門日本語アカデミックコミュニケーション科目

授業スケジュール


回	授業内容	回	授業内容
1	オリエンテーション	9	話題提供とディスカッション（4）
2	話題提供とディスカッション（導入）	10	話題提供とディスカッション（5）
3	話題提供とディスカッション（準備1）	11	ポスター発表（導入）
4	話題提供とディスカッション（準備2）	12	ポスター発表（準備1）
5	話題提供とディスカッション（準備3）	13	ポスター発表（準備2）
6	話題提供とディスカッション（1）	14	ポスター発表（1）
7	話題提供とディスカッション（2）	15	ポスター発表（2）・まとめとフィードバック
8	話題提供とディスカッション（3）		

4-2. ポスター発表の活動について



大阪大学

ポスター例を提示

例)	タイトル	所属・学年・名前
1. はじめに	5. データ収集	
_____	_____	
_____	_____	
2. 研究背景	6. データ	
_____	_____	
_____	_____	
3. 研究の目的	7. 分析結果・考察	
_____	_____	
_____	_____	
4. 研究方法	8. 今後の課題	
	_____	
[図1. _____]	<参考文献>	

1. すでにデータ収集を行っている場合

- ・はじめに
- ・研究背景、先行研究
- ・研究目的
- ・研究方法
- ・データ収集方法
- ・分析方法
- ・データの提示
- ・分析結果、考察
- ・研究の限界/まとめ/今後の課題

25

4-2. ポスター発表の活動について



大阪大学

2. 予備調査を行った段階

- ・はじめに
- ・研究背景、先行研究
- ・研究目的
- ・研究方法
- ・データ収集方法
- ・分析方法
- ・データの紹介（現段階でわかっていること）
- ・研究を通して明らかにすることができるであろうと考えていることの紹介

3. 研究計画の段階

- ・はじめに（学部生の時の論文などの紹介）
- ・研究背景、先行研究
- ・研究方法の検討、比較
- ・データ収集方法の検討、比較
- ・自分の研究の独自性と意義
- ・研究を通して明らかにすることができるであろうと考えていることの紹介

4-2. ポスター発表の活動について



発表当日

研究テーマに関するポスター発表

- ・ 時間は約40分
- ・ 聞き手は質問をする



発表者は短く説明する練習をする

聞き手は質問の際、

- ・ 用語の定義
- ・ 研究対象の選定
- ・ 妥当性の担保について
- ・ 結果についての詳細
- ・ 今後の課題

についてであれば、自分の専門でなくても質問できる

27

4-2. ポスター発表の活動について



タイトル例：

※ 本スライドの提示は当日のみ ※

4-2. ポスター発表の活動について



ポスターに使われる図など:

※ 本スライドの提示は当日のみ ※

4-3. 受講生の声（コメントシートより）



- ・基本的に理科の内容ですが、発表者は理解しやすく説明してくれました。研究内容や方法を理解できなくても、研究の意義がわかると聞きがいがあると思いました。
- ・発表者の発表を聞いた上で、自分が興味を持っていることを質問しました。ほかの研究を聞いて、自分の研究に対する理解も深まりました。
- ・皆さんからいただいた質問は私の研究に対して本当に助かりました。また、自分の知識で他の専攻がある方に説明するチャンスは凄くいいと思います。
- ・たくさん面白い発表を聞きました。私は理系出身ですけど、文系の研究も大変勉強しました。ありがとうございます。
- ・自分の研究について日本語で表現することにはまだ不足があり、専門分野の日本語をさらに学ぶ必要があります。
- ・進歩を感じて、とても嬉しいと思います。今後も日本語の学術発表の慣れるを目指して続けます。



5. まとめ

- ・大学における日本語プログラム、受講生は多様化している
- ・受講生にとっての日本語の位置づけ、目指す到達点も様々
- ・受講生が持つ共通項を軸に授業を展開することは可能

- ・自分の研究の独創性、研究理念を明確にする方法として他者への説明は有効である
- ・論理的思考を培うために、何度も繰り返し説明するという経験が役に立つ
- ・「専門日本語教育」がどう貢献できるのか継続して考える

参考文献



大阪大学「学際融合科目」

<https://itgp.osaka-u.ac.jp/news/iec/2024/07251516205516/> (2025年2月15日閲覧)

大阪大学・京都大学 公共件における科学技術・教育研究拠点 http://stips.jp/tool2016_2/ (2025年2月15日閲覧)

大阪大学国際教育交流センター「留学生対象日本語プログラム」 https://ciee.osaka-u.ac.jp/education/japanese_program/ (2025年2月15日閲覧)

小林傳司 (2007) 『トランス・サイエンスの時代 科学技術と社会をつなぐ』NTT出版

谷岡寛治 (2018) 「どのようにアカデミック・コミュニケーション能力を高めるか」『企業と社会フォーラム学会誌』, 第7号, pp. 68-77.

村岡貴子 (2023) 「留学生の研究活動を支える日本語教育と教育研究支援体制」村岡貴子 (編著) 『大学院留学生への研究支援と日本語教育 専門分野の違いを超えて』 pp. 3-18, ココ出版



ご清聴ありがとうございました

全体討論（要約）

司会

村岡 貴子

国際教育交流センター 教授

生天目先生：日本人学生とのコミュニケーション不足による留学生の独りよがりな姿勢が問題点として指摘されたが、そこで日本人学生に期待されているものは何か。

福 良：留学生が少なければ、日本人学生は留学生を「お客さん扱い」し、サポートしようとする。しかし留学生が多くなると、留学生は留学生同士で関わるようになる。すると、留学生とコミュニケーションをとる日本人学生は、留学生とのコミュニケーションを重要だと考えている「意識の高い」学生に限られてしまう。普段から、お互いに高め合うようなコミュニケーションが必要とされる。

福 良：研究室に長時間滞在することにはメリットもあるが、研究室にいなければというプレッシャーが問題になっているという先行研究の指摘もある。この点に関してどう考えるか。

生天目先生：今回のインタビューでは、研究室に長くいたくないという留学生は見られなかった。留学生のなかには、家庭の事情や日本語の問題で研究室に長くいることが難しい学生がいる。理工系研究室においては研究室で長時間過ごすことが是とされてきたが、この点での意識の変化は、日本人学生を含めてありそうである。

瀬 井：学際融合クラス「上級専門日本語アカデミック・コミュニケーション」においては、他の研究室の運営（研究の進め方）に関心がある学生が多く見られ、共通のキーワードを持つ研究室でも多様であることが窺える。生天目先生のご所属のなかでの研究室運営も多様なものであるか。

生天目先生：研究室によってさまざまである。教員主導で進める研究室があれば、個人で黙々と作業する研究室もある。

フロア1：独りよがりな学生は日本人学生の中にもいる。指導教員にとっては、日本人学生よりも留学生のほうが独りよがりであることの弊害が大きいという認識なのか。それとも日本人学生に独りよがりな学生が偶然いなかっただけなのか。

福 良：インタビューでは、コミュニケーションをとらない傾向は留学生のほうが強いという印象を受けた。留学生のほうが言語的なコミュニケーションの面で弊害が出やすいと認識されているようである。日本人学生の場合、学部時代からの付き合いがあり積極的にコミュニケーションをとらなくても暗黙の共通理解があると推測できるが、留学生で共通理解がない場合はコミュニケーションをとらなければ問題が解決しない。

フロア2：文系の学生は、ゼミで発表した際に他の学生から意見をもらうことがあり、卒業・修了時に他の学生への感謝を述べることがある。生天目先生・福良先生のお話を聞くと、理系の学生は、自主的に学生同士が議論することを期待されている、チームで研究に取り組むため個別に議論する時間がとられていないのかもしれない、ということが考えられる。理系の学生が個別に研究をする、あるいはチームで研究をするとはどのような状況なのか。理系の学生が自身の研究について他の学生からコメントをもらう機会があった場合、そこでの感謝や学びは語られたか。

生天目先生：インタビューではゼミの方法は聞けていないが、毎週のゼミで進捗を報告する際は先生からのコメントが多く学生からのコメントは少ないようである。

福 良：ゼミの形態はそれぞれ違う。教員が個別に声をかける研究室と、毎週集まってゼミで進捗を報告しあう研究室がある。

フロア3：ゼミで学生同士がコメントし合うことはあるか。

福 良：どの程度かは分からないが、なんらかのコメントは出ていると推測される。ディスカッションは英語で行うが、英語だと日本人学生に微妙なニュアンスが伝わりにくいことがある。そのときは日本語が分かる留学生や博士課程の学生がサポートしている。

生天目先生：ゼミ以外の場で論文の構成などを学生同士で話すことはある。留学生のほうが論理的思考の能力が高い場合もあるため、対等な関係でディスカッションする。

フロア4：研究の停滞から研究室に行かなくなる、進捗報告をしなくなる学生の対応について、教員はどのような工夫をしているか。

福 良：進捗状況に関わらず、とにかく昼までに大学に来てもらうために、昼礼を行っている例がある。

司 会：研究を進めたり授業に出席したりするという目的がなくても、誰かと会って情報を得るという積み重ねが重要ではないか。無駄や非効率と言って切り捨てたくない。

福 良：同国人とのネットワークができていて日本語が最小限でよい留学生や、日本では就職しないと決めている留学生に日本語の学習を強制することはできない。日本語に対する留学生の姿勢がさまざまな中で、どのように学生をサポートしていけばよいか。

生天目先生：そういった学生への日本語教育は難しい。人間関係の面では、自分のあり方を客観視する必要があると考えている。現状を意識的に選んでいるならよいが、他の選択肢に目を向けることで新たな刺激があるかもしれない。他の日本人学生と関わらなくてもいいと思っても、考えが変わる可能性がある。自身の学生の中に、日本語能力が非常に高いものの日本人学生と交流しない留学生がいた。話を聞くと、本当は日本人と関わりたかったことが分かったため、挨拶から始めてみるよう促し、上手くいったという実例がある。

福 良：「上級専門日本語アカデミック・コミュニケーション」を受講している学生は、日本語や日本語でのコミュニケーションについてどう考えているか。

瀬 井：論文は基本的に英語で書くため、日本に来たからには日本語を話したいという目的で受講する学生が多い。完全に独学で上級レベルに達した学生が多くなっている。

司 会：コースの縛りなどで普段日本語を話す機会がないと、日本語のクラスが「オアシス」の場のようになっていると話す理系教員もいた。また、英語コースではじめからすべて英語を使用していた学生の場合、博士課程に進学して日本の就職を視野に入れたとしても、そこから日本語を勉強しようとは思わなくなる事例を指導教員から聞いた。どのような場合でも強制はできず、日本語の学習はいつからでもできるが、比較的早いタイミングでの学習開始に適切な時期はある。

フロア5：理系研究室でのコミュニケーションは英語ドミナントであると言われている。学術は英語でよいが、コミュニケーションには日本語が必要である。学術とコミュニケーションは不可分であり、コミュニケーションがうまくいくことで研究もうまくいくことがある一方で、日本語ができないと学術もできないということがある。日本語は必要ないと考える学生がいるなかで、どのように英語と日本語の折り合いをつけながら学生のQOLを高めていくのか。

福 良：最先端の研究をしていると、教員でも英語で完全に理解できるとは限らないが、日本語で解釈すると理解できることもある。学術は英語、コミュニケーションは日本語、とはっきり分かれるのではなく、一単語でも日本語で言えることでより研究が深まる。日本で就職したいなら日本語を勉強する必要があると助言する教員もいる。理工系が常に英語というわけではないため、バランスを取るのが難しい。

瀬 井：QOLの面で日本語を必要とする留学生が多い。研究会や学会での発表は英語だが、そこでの雑談や自己紹介は日本語で行われる。日本語が分かればこのようなコミュニケーションに参加できると考えている留学生が多い。就職活動の面接や職場での勤務においても日本語が分かったほうがよいと思われることがあり、自身のQOLを高めるために日本語を学習したい気持ちがある。

司 会：研究室において、落ち着いた場面では英語で話すことができても、一方で、実験中などでの危険な場面で、「危ない！」といったようなとっさに出てくることばは日本語である。そのような緊急時の対応策の共有が必要である。また、かつて、理工系の教員から、「研究は英語でできるが、教育は難しい」と聞いたことがあった。

フロア6：「上級専門日本語アカデミック・コミュニケーション」をより多くの日本人学生が受講すれば相互交流が深まるのではないか。日本人学生の割合はどれくらいか。就職活動では研究内容を質問されるため、日本人にとっても有用な授業であると感じた。

瀬 井：18人まで履修登録できるが、過去4年で日本人学生が履修登録したケースは2回のみである。1人は最後まで履修したが、もう1人は、留学生を対象とした授業であると感じてしまい、履修を取り消してしまった。

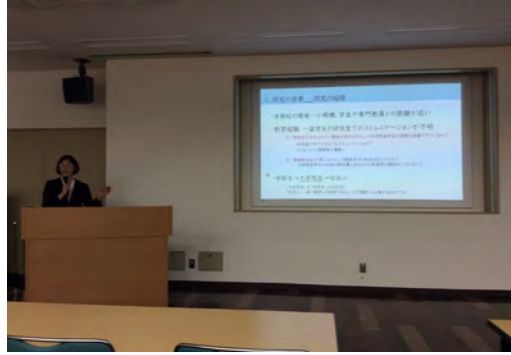
フロア7：就職活動に役立つという面を押し出すと日本人も集まりやすくなるのでは。

司 会：大阪大学における学際融合教育科目は、所属先の研究科以外で自分の専門以外の授業も履修することができる建付けになっており、現在では多くの科目が存在する。今後も共修に向けてさらに工夫できる場所を探したい。本日の協議の内容を簡単に3点にまとめたい。

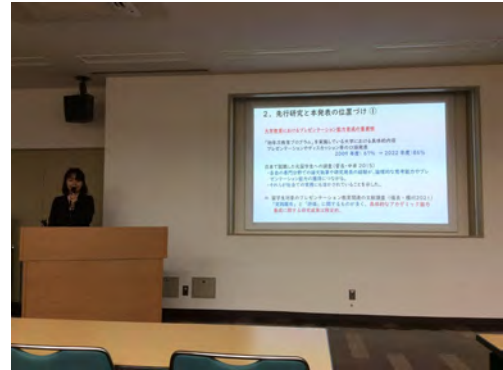
- ①理工系の研究室のメンバーのコミュニケーションは、他者との協働で何かをやり遂げるという経験の蓄積が重要である。
- ②相手に伝達できているか否かを考えること、自身のコミュニケーションの目標や目的を内省し、必要であれば改善や挑戦を行うという、長いスパンでのプロセスが重要である。
- ③今回共有された事例を、分野の違いを超えて、今後の大学における教育や学習支援の貴重なリソースとして蓄積することが重要である。

協議会の様子

講演



発表1



発表2



全体討論



会場の様子



付録：過去の大阪大学専門日本語教育研究協議会の開催状況

1. 第1回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「大学院レベルの専門日本語教育とは何か」
日時：2007年3月13日（火）13：00～17：50
場所：吹田キャンパスICホールRoom 5 & 6

2. 第2回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「大阪大学における専門日本語教育のさらなる定着に向けて
—留学生・指導教員とのディスカッションを通して—」
日時：2009年3月10日（火）13：00～17：30
場所：吹田キャンパス ICホールRoom 5 & 6

3. 第3回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「専門日本語教育におけるライティング能力の養成
—留学生と日本人学生の双方に対する教育の共通課題—」
日時：2010年3月9日（火）13：00～17：30
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1

4. 第4回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「キャリア形成につながる専門日本語教育を考える」
日時：2011年3月8日（火）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1

5. 第5回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「日本語教育のスタンダードの課題と展望」
日時：2012年2月15日（水）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1

6. 第6回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「研究留学生のための専門日本語教育を考える」
日時：2013年2月19日（火）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1

7. 第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「上級レベルの専門日本語教育 -理論と実践-」
日時：2014年2月17日（月） 13:00～17:00
場所：吹田キャンパス IC ホールRoom 5 & 6

8. 第8回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「グローバル時代を生き抜く力の養成と大学における日本語教育を考える
-大学から社会への橋渡しを視野に-」
日時：2015年2月17日（火） 13:00～17:00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター 2 階 会議室2

9. 第9回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「専門日本語教育におけるIT 活用の可能性」
日時：2016年2月16日（火） 13:00～16:55
場所：吹田キャンパス IC ホールRoom 5 & 6

10. 第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「内容言語統合型学習（CLIL）の実践に向けて」
日時：2017年2月21日（火） 13:00～17:00
場所：吹田キャンパス IC ホールRoom 5 & 6

11. 第11回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「学習者オートノミーを育む言語学習とその支援」
日時：2018年2月16日（金） 13:00～17:00
場所：吹田キャンパス IC ホールRoom 5 & 6

12. 第12回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「市民性教育と日本語教育」
日時：2019年2月19 日（火） 13:00～17:00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター 1 階 研修室

13. 第13回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「留学生大量受け入れ新時代の大学における日本語カリキュラムの再考」
日時：2020年2月18日（火）13:00～17:00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター2階 会議室2

14. 第14回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「日本語の上達を支援する教育実践の創造
ーITを有効に活用したチームでの教育実践の可能性ー」
日時：2022年2月15日（火）13:30～17:00
場所：オンラインで開催

15. 第15回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「学部初年次から大学院博士課程までの学習・研究活動に必要な
日本語ライティング教育実践の諸相」
日時：2023年2月15日（水）13:30～17:00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター1階 会議室1

16. 第16回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「CEFR-CV以降の日本語教育を考える」
日時：2024年2月14日（水）13:30～17:00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター1階 会議室1